

もう一人の家庭教師が
口悪いです

メルフェン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五人姉妹を卒業させるために、もう一人の家庭教師としてアルバイトすることになった天宮輝。

そんな彼が奮闘する物語。

E P.	16	結びの伝説	2000	日後
の君へ	3	日目	#	中野三玖：オリジ
ン#	—	—	—	—
E P.	17	結びの伝説	2000	日
後の君へ	—	—	—	—
	231			
			212	

E p . 0 1 天宮 輝

「あんたたちー！いい加減起きなさあああいい！」

天宮一家の朝は、この怒鳴り声から始まる。小さい頃から聞き慣れた、母の声が寝ぼけた頭に響いた。

「うっせえ！朝つばらから大声出すんじゃねえよ！」

天宮 輝

本作の主人公。高校二年生。

血液型 O型

「あんたたちが起きないからでしょうが！」

天宮 遥 母。

年齢の割には美貌が衰えない悪魔。

「ふああ．．．．おはよく、お母さん」

天宮 凜

天宮家 長女。大学一年生。

血液型 O型

美人、非常にけしからん身体。

「おい、クソ姉貴！なんで真っ裸なんだよ！服着ろつつつてんだろ！クソが！」

「クソクソうっさいわね！この格好が一番楽なのよ！大体、この洗練され尽くされた美
軀を毎日見れてるだけでも感謝しなさいよ！貢げ！千円ぐらい貢げ！」

「貢がねえよ！てめえには羞恥がねえのかよ！」

「ないわ！」

「そうか」

「うん」

「勝手に納得すな！凜は早くシャワー浴びる！輝は制服に着替えてさっさと下に行つて
ご飯食べる！」

輝は制服に着替え、階段を降り、テーブルに置いてあるパンを啜え鏡の前で寝癪を治
す。

「お兄、行儀悪いよ」

天宮 優

天宮家 妹。 中学三年生

血液型 O型

美少女、絶賛発育中らしい。

「ッ!?!」

親友1 田嶋 周助

バカ

「おま、その髪……ぶふお」

「おーい! 田嶋、天宮! こつちで飯くお……ふへ」

親友2 小野寺 弘樹

アホ

「なアんだよその頭はよお!」

絶賛、二名のバカとアホは食堂で大笑いしていた。輝の髪型は、朝の寝癖が治らなかつたため、母の遙が無理やり七三分けにしてしまったのだ。

「うるせえ、笑うな! クセがついちまって洗っても治んねえんだ! おい、笑うな! ぶつ殺すぞ!」

「やってみろよ七三分坊や!」

「てめえ!」

『まあたやつてるよ、あの三人』

『いいぞ! もつとやれ!』

「お前らも黙つてろ!」

外野が囃し立てるのを一喝し、小野寺が取っていた席に座り三人で食事を始める。

「なあ、テストどうだった？」

「クソムズだったな」

「授業聞いてりやわかんたろうがよ」

「大体、なんでお前みたいなのが悪いくせにイケメンなやつが頭いいんだよ。クソが」

「ぶっ飛ばすぞ」

「なあなあ！あの数学のテストにあった円グラフ！あれなんか見えなかったか？」

「何って、円しかねえだろ。なあ、天宮」

「おう」

「甘いな、お前ら。あの円に俺はな、中心に点を書いて提出したんだ」

「へえ、それでなんて書いたんだ？」

「おっばい！案の定、0点でした！」

「お前、気持ち悪いな」

「はげどう」

二人の非難の視線を浴び、完璧に心が折れてしまったらしくテーブルに突っ伏した。

「天宮に言われんのはいいけど、田嶋にだけは言われなくなかった」

「はー？」

「はーじゃねえよ。お前はどうかだったんだよ」

「俺か？聞いて驚け、名前の欄に『お前を因数分解してやる』って書いて提出したぜ」

「お前、頭腐ってんだろ」

「俺のおっぱいよりひでえじゃん」

「遣伝子からやり直せよ」

「それ、俺もさつき気づいた」

とんでもないバカ話を聞いていると、目の前を一人の生徒が歩いて行った。

「焼き肉定食、焼き肉抜きで」

「はいよ」

食堂の人からお膳をもらい、歩いて行った。

「なんだ、あいつ」

「んあ？ああ、同じクラスの上杉じゃん」

「あいつ、毎日焼き肉定食頼むのに焼き肉抜くんだよな」

「天宮、お前知ってるか？学年一位になれない理由」

「ああ？知らね。興味ねえからよ」

「上杉が学年首席なんだよ。お前を差し置いてだから相当頭いいんだろうなあ」

「ふーん。見た感じ、頭良さそうでもんな」

「きつと、俺たちとは見てる世界が違うんだろうさ」

「バカ共二人に俺を含めるな」

「え!?!」

少しだべつてから席を立ち、返却口へ歩いていると横から歩いてきた人影にぶつかってしまった。

「おつと……悪い、大丈夫か？」

「す、すみませんでした」

「ここ人多いから、ちゃんと前向いて歩けよ」

再度お辞儀すると、そそくさと逃げるように行ってしまった。

「あーあ、振られたな」

「その口の悪さなんとかしろよ。イケメンのくせに」

「ああ!?! うっせえよ!」

「そーゆーと!」

「ツ……. けっ」

乱暴に返却口にお膳を返し、食堂を後にしようとした所に声がかけられた。

「あ、きみきみ!」

「……. あ?」

声をかけた人物はアシメントリー調のショートヘアと右耳に填めたピアスが特徴的な美少女だった。胸元が危なっかしい気がするが、まあいいだろう。

「何の用だよ」

「ほら、さつき私の妹がぶつかりそうになってたでしょ？大丈夫かなって」

「別に何ともねえよ」

「おーい、天宮ア。教室戻ろうぜー」

「おおー。今行くー。悪いな、俺行くわ」

そう言つて輝は踵を返し、田嶋と小野寺の方へ行き、食堂から消えた。

「へえー、天宮くん、か」

その少女は意味深な笑みを浮かべていた事を輝は知らない。

E p. 02 今日から家庭教師やります

「田嶋くん、いい加減起きなさい！」

「んお、朝つすか？」

「もう午後だよ！全く君というやつは……小野寺くん！どこから出したか分からないけどPS4を仕舞いなさい！山田くん！黒板消しで遊ぶんじやない！誰だ誰だ、黒板におっぱいを書いたやつは！」

「せんせー、午後から転校生が来るんですよねー。早く紹介してくださいー」

「あ？午後から来んのかよ」

「おや？輝氏はご存知ではないのでござるか？」

級友Ⅰ 及川 正和

オタク

「……………おう」

「では不肖、この及川正和が説明させてもらうでござるよ。この度転校してくるのはかの有名な黒薔薇女子の生徒でござる。黒薔薇女子といえば巨乳から、拙者が愛する貧乳まで選り取りみどりの美女が集う楽園でござろう？ハア、ハア……………」

「落ち着けや、息荒えぞ」

「輝氏は巨乳派でござるか？貧乳派でござるか？」

「おい、とりあえずー」

「そうでござるか……ならば仕方ないでござるな」

「何も言つてねえよ」

「貧乳の宝庫はやはりナマチュウに限るナリ……ナマチュウ、尊い……」

（なんでこんな頭イカれてるやつが俺の隣りなんだよッ!!）

「うおおおおおお!!ウアアアツモ……ゴホン、興奮のあまり熱盛と言つてしまひそうでした。すみませんでした」

（後ろは後ろで一人でなんかやつてるしよ……）

これが輝のクラスの日常風景。もはやカオスを超えたカオス。このクラスの担任はストレスマツハ、胃袋に穴が開くの待ったナシだろう。

「皆さんが静かになるまで……十分かかりました」

（（うっぜえええ））

「それでは転校生を紹介します」

教室のドアが開き見覚えのある顔の美少女が入った。

（あ、アイツ食堂で……）

「中野五月です。どうぞよろしくお願いします」

『女子だ』

『普通に可愛い……』

『あの制服って、黒薔薇女子じゃない？』

『マジかよ、超金持ちじゃん』

『おいおい、何者だよ』

「へえ……マジモンのボンボンってわけか」

「しかし、解せぬでござるな。お金持ちなのに何故、このような一介の高校に……」
「知るかよ」

面倒くさそうに目を瞑り、その日は幕を閉じた。

翌日

「飯だ飯ー！いやー、この時間のためだけに登校してるもんだよな！」

「留年しても知らねえぞ」

「お、おい！見ろよ！あれ！」

「あ？何をだよ……ッ!？」

食堂の一角の席で同じ顔の五人の女の子が食事をしていた。違うのは髪型と髪色ぐらいだろうか。

「同じ顔が五つ……」

「一卵性の五つ子かよ。やべえな」

「一卵性？」

「一卵性双生児とか聞いた事ぐらいあんだろ？」

「あるようなないような……」

「いわゆる、双子だ。元々一つの受精卵が二つに分かれて発育したやつを、一卵性つつーんだよ」

「そののどこがやべえんだよ」

「あのなあ、ただでさえ双子が生まれるのが100分の一なんて確率なんだよ。それが五人だぞ？やべえだろ、普通に」

「はえ、たまげたなあ。お袋さん、大変だったろうな、出産の時とか」

「おら、さつさと飯食うぞ」

そう言つて食堂の中を歩き回っていると、昨日の少女の目にあの少年が映つた。

「あ！おーい！」

「およっ？」

「んあ？」

「ああ？」

小野寺、田嶋、輝の順で振り向く。

そこに居たのは昨日輝に話しかけた美少女だった。

「あ。あんたは昨日の？」

「何してるの？」

「何って席探してんだよ。見てわかんねえのか」

（ホントにブレねえなコイツ）

「でも、どう見たって空いてないよ？」

「つるせーな。んで、なんか用かよ？」

「ううん、特に！君が見えたから話しかけただけ」

「用もねえやつに話しかけるか？ふつー」

（んだよコイツ……）

僅かながら苦手意識を持つ輝をお構い無しに、その美少女は話を続ける。

「そんな迷える男子三名に朗報だよ」

「別に迷ってねえよ」

「じゃじゃーん！丁度ここに席が三つあります！」

「なん．．．．．」

「だと．．．．．」

「あんだ、本気で言ってるのか．．．．．？」

丁度五つ子の座っているテーブルに三つの席が設けてあった。

「お、おい。さつき三つも席あったか．．．．．？」

「いや、なかったと思うけど．．．．．」

「お、おい。天宮、なんか怪しいぜ．．．．．つてもう座って食つとる！」

そんなこんなで結局、五つ子と昼食をとることになった。当然周りの目はここに集中する。

『天宮が女子と飯食ってる．．．．．』

『あの天宮が．．．．．』

『女子に興味なさそうなのにまたどうして』

『しかも一緒に食べてる五人、めっちゃ美人だ』

『『『あー、クソ。天宮なんか滑って頭打って死ねばいいのに』』』

『聞こえてんぞ！クソ共が！僻むんじゃねえ！』

『落ち着けよ、天宮。皆ビビってるぞ』

『ビビんじゃねえよ！』

「いや無理だつて」

田嶋と小野寺でなんとか座らせるが、輝に関してまだ怒りが収まらず、カタカタと震えている。

「……………怖い」

「ああ!?!」

「……………ッ!」

ヘッドフォンを首に掛けた女の子の言葉が聞こえた輝は思いつきり睨みつけると、萎縮し下を向いてしまった。

「やめなっさい、バカタレ」

ベシツ、と田嶋が輝の頭を叩く。

「何すんだよ!」

「ちゃんと見ろ、あの子。お前にビビって下向いたじゃねえか」

「知らねえよ!ビビんな!」

「……………」

「ツ……………クソがッ」

そう言つて席を立ち、一人その場を去っていった。

「あ、おい!天宮……………!」

「田嶋ア、あんま天宮追い詰めんじやないよ」

「別に、俺はそんなつもりじゃ……」

「口の悪さなんざ、そう簡単に直んねえよ。天宮もぶきつちよなんだから」

「……なんか、悪いな。空気悪くしちゃって」

「あ、ううん。大丈夫だよ」

「まあ、なんだ。アイツは……天宮は見ての通りの性格だな。口は悪いし、開けば「クソ」しか出てこないけど」

「根は優しいやつなんだ」

「とてもそうには見えないけど」

「ご最もだな。アイツ、困ってるやつを放つとけない奴なんだよ。実は俺とこいつ、留年候補なんだよ」

田嶋が指で小野寺を指した。

「教師すら見捨てられた底辺の俺らを、天宮は見捨てないでくれたんだ。補習の時も俺たちと一緒に受けてくれて、難しいところとかはあの口の悪さでちゃんと教えてくれる」

「ファミレスで勉強した時なんか、天宮が叫びすぎて出禁になったしな！」

「そのおかげで一年から二年に進級出来たしよ。返しても返しきれねえ恩があんだ。」

「んあ?」

「これ、天宮くんに渡してくれる?」

差し出されたのは一切れの紙だった。



「家庭教師だあ?」

紙切れに書いてあったことを口に出してしまった。

(渡してきたのがあのいけ好かねえアバズレ女つつー事はアイツの家庭教師ってこだな)

輝は周囲を見渡し、とある人物を発見した。

そしてー

「おい、星頭」

「星頭って……ひっ!」

「ちよいツラ貸せよ」

(殺される……!)

この時の五月の顔が今でも忘れられない。

「家庭教師をやれってどーゆーことだ」

「そ、それはもちろんあなたの成績を買つてのことです」

「おいまして、てめえら五人全員を一人で面倒見ろつてか？」

「いえ、あともう一人います」

「俺だ」

「ああ？」

振り向いた目線の先にはあの男が立っていた。

「ガリ勉野郎かよ」

「学年首席の上杉さんと、次席の天宮さん。二人に家庭教師をお願いしたのは私たちの父です」

すると屋上のドアが開き、同じ顔が四人入ってきた。

「あれ？優等生くんと天宮くん！五月ちゃんと三人で何してるの？」

「いたー！コイツ、昨日ストーカーしてたやつ！」

「ええつ。上杉さん、ストーカーだったんですか？」

「二乃。早とちりしすぎ」

「てめ、食堂のアバズレ女！どーゆーことだ！家庭教師なんて話聞いてねえぞ！」

「まあまあ、落ち着いてよ。カツコイイ顔が台無しだぞ？」

「ぶっ飛ばすぞ」

E p. 03 天宮家、それは魔王の城 1

家庭教師開始から、早一日目

「ちよいと出かけてくらあ」

「お兄、どこ行くの？今日休日だよ？」

「野暮用だ、詮索すんな」

「まさか……」

「あん？」

すると優が大きな声で叫んだ。

「お母さああああん！お兄に彼女が出来たあああああ！」

「あ、ああああああんた！い、一体なんて言ったの!?その子に！まさか、刃物とか突き付けて……！」

「実の息子を通り魔みたくすんじゃねえよ」

「姉のあたしを差し置いてなにか!?一人で大人の階段登ろうとしてんの!?あたしだってまだシンデレラなのに……!!」

「知らねえよ。つか服着ろよ、デブ」

「まあまあ、落ち着きなよ三人共。輝、後でその子を家に連れておいで」
「あ？なんでだよ」

「僕の可愛い息子に色目を使った小娘の顔を拝む為だよ」

「……………」

父の言葉に一同は呆然とした。

顔は笑っているが、目が笑っていない。

そう、父は——極度の親バカである。

「あ、あなた？ちよつと落ち着いて……………」

「僕は至って平常心だよ」

「いや、握り拳に血管浮いてんですけどそれは」

「お、お兄。取り敢えず、早く行って」

「お、おう」

逃げるように家を飛び出した。

輝に彼女が出来ないのは、まあ、ガラが悪く見え、近づいてこないのと、あの父のせいでもある。それは輝だけでなく、凜、優にも言えたことではあるが。

時間はまだある。寄り道しても大丈夫だろう。

「遅い！アイツは何してんのよ！」

「二乃、うるさい」

「大丈夫だよ、そのうち来るって！」

すると前方から歩いてくる人影が見えた。

「あつ！来た来た！……って、何か背負ってない？」

四葉が目を凝らして見ると、

「あつ！天宮さん、お婆ちゃんをおんぶしてる！」

「はあ!？」

「ごめんなさいねえ〜」

「氣いつけて帰れよ」

十字路で老人を下ろし、目的のタワーマンションへ向かう。もう眼と鼻の先だが、そこで待っていたのはあの五人姉妹のうちの三人だった。

「ああ？お前からこんなところで何突っ立ってんだよ」

「あんたを待ってたのよ！」

「おつはようございます！天宮さん！」

「おう。昨日ガリ勉野郎から貰った英語の課題やったか？」

「分からないところがあつたので、手をつけてません！」

「随分なドヤ顔で言うじゃねえか。教えてやっから一緒にやんぞ」

「了解です！」

「あー……」

輝は四葉の次に、ヘッドフォンの美少女を向いたが名前が思い出せない。

「顔が似すぎなんだよ。お前誰だ」

「むー……」

プイツとそっぽ向き、建物の中に入っていった。

「あ！おい！待てや！」

「三玖が拗ねちやつたじゃない！」

「うっせえな！仕方ねえだろ！」

「まあまあ！早く行きましょう！」

こんな感じで手探り状態で家庭教師をやっている。

（コイツら全員、なんか特徴がねえのかよ。せいぜい覚えれたのが、このウサギ頭の四葉ぐらいだぞ。あー、あと、星頭の五月か）

エレベーターの中でそんな事を考えてると、四葉が顔を覗き込んできた。

「天宮さん、顔怖いですよ？」

「ああ!?!怖くねえよ!」

「あは!いつもの天宮さんだ!」

「……………つたく」

エレベーターの電光表示板が「30」と数字を示し、ドアが開く。

そう、このボンボンバカタレ五人姉妹はタワーマンシヨンの最上階に住んでいる。

「おい、ツインテール」

「ツインテール?……………私のこと!?!」

「てめえ以外に誰がいんだよ」

「昨日も名前教えたでしょ!?!二乃よ!にいのお!」

「やかましいわ」

「どこがよツ!?!」

「二乃と天宮さんって漫才師みたいだね」

無駄話はここまで。

早速中に入ると、ただただ広いリビングに五月がポツンと一人だけ座っていた。

「あ、天宮さん」

「よう……………おい、あのアバズレはどこ行った」

「アバ……………?あ、一花ですか?」

五月の目線が階段を上がった先にある部屋の一つに止まる。

「あんのボケナス女があ．．．．．!」

輝は猛スピードで階段駆け上がり、ボケナス女こと一花の部屋を乱暴に開けた。

「さっさと起きやがれ!ポンコツが!」

しかし、輝の顔が信じられないものを見る目に変わる。

「んう．．．．．あれ、天宮くん?おはよ〜」

「どうなってやがる．．．．．昨日てめえの部屋一時間かけて掃除して綺麗にしたのに、なんでまた汚部屋に戻ってんだよ!」

「いや〜、褒めても何もでないよ?」

「褒めてるように聞こえてんなら、てめえの耳はもうお終いだつての」

「え!?!褒めてないの!?!」

「頭湧いてんのか?お前。とつとと起きやがれ。汚部屋の掃除は後ですんぞ」

グイッと纏っている毛布を引き剥がそうとしたが、

「あーダメダメ。服着てないから照れる」

「てめえも露出教の教徒かよ!」

「教徒?じゃないけどほら、私って寝る時基本裸じゃん?」

「いや知らねえよ」

「あ！シヨーツ履いてるから安心して」

「ならいいわ。おら、行くぞ」

「え!?よ、良くないよ!」

「あれ?天宮さんって裸みても照れないんですか?」

「こちとら毎朝拜んでんだよ」

毎朝拜んでる

「ちよ、ちよつと待って!?それってどういう意味!?!」

「ああ?そのまんまだろうが」

そのまんまの意味

「えっちなのは良くないと思うよ!」

「私もそう思います!」

「はあ?ワケわかんねえこと言ってるねえでとつと降りて来いよ」

そう言つて一花の部屋を出る。ドア越しから二乃と輝の声が突き通るように響く。

『ちよつと!三玖の機嫌直しに行つてきなさいよ!』

『はあ!?まだ拗ねてんのかよ!いい加減にしろよ!』

『あんたが悪いんでしょうがッ!』

『いてッ!?脛蹴んじゃねえよ!その髪にソースぶっかけんぞ!』

「ねえねえ一花。天宮さんって、案外プレイボーイなのかな……」
「ど、どうなんだろうね……」

二人して顔を真っ赤にしている間、輝というと……
「おら！開けろ！おい！聞こえてんのか?! いんのは分かってんだよッ！」

闇金の取り立て顔負けの言い方で格闘すること数十分。俵を担ぐようにして三玖を確保し、やつと愚姉妹五人の勉強会がスタートした。この部屋に着いてから実に小一時間が経った。

「ライスは『L』じゃなくて『R』だっつってんだろ！お前はシラミを食うのか?! 食わねえだろ！」

「あわわわ」

「こんなクソ簡単な単語すら間違うレベルかよ……救いようがあんのか……」
「？」

「えへへ、教えてくれてありがとうございますっ」

「……おう、もう間違うんじゃないぞ。こんなケアレスミスで減点なんざ勿体ねえだろ？」

(やる気は十分なんだけどなあ……)

やる気で勉強が出来るようになれば、誰も苦労なんかしない。

だからこうやって教えてる訳だが、輝とて同じ学生、プロではない。教え方をまた考える必要があるようだ。

「ちよつと、天宮！四葉ばかりずるいじゃない！私のも見なさいよ」

「わーったわーった。ちよつと待てよ」

四葉の隣から二乃の隣へ行き、数学のプリントを見る。

「この『ー』はどっから出てきた」

「普通に計算したんだけど」

「お前、普通の計算って足し算引き算だけと思ってねえよな」

「……お、思ってないわよ」

「明日からガリ勉野郎とマンツーマンで教えてもらえ。数学の基礎からな」

「はあ!?! あんな奴とマンツーマンなんて死んでもイヤよ！ねえええええ！やだあああああ
！」

「けっ」

「ねえねえ、天宮くん」

一花に呼ばれ、今度は一花の隣へ移動する。すると突然顎クイされ、輝は目を丸くし

た。

「ねえ……私に因数分解されてみたくない……?」

「はっ倒すぞボケが」

軽く一蹴してやった。こんな尻軽にはこのくらいが十分だと言わんばかりに睨みつけ、また軽く見て回る。

それをしばらくしているうちに時刻はもう五時を回っていた。

「はあああああ、疲れたああああ」

「頭、パンクしそう……」

「四葉ア、お前は基本的に全教科クソ何だから学校でも復習と予習しとけよー。サボつたら殺す」

「い、イエス・マアム……」

「あと五月」

「は、はい」

「お前、俺と同じクラスだったよな?」

「そ、そうですけど……」

「真面目に授業受けてるみてえだけど、なんでこんな点数がクソ低いひきんだ? 聞いてやるから言ってみろよ」

「そ、それは……」
 すると、輝の携帯から着信音が鳴る。

「あ？誰からだ？……」

（お、親父……！）

さあ、問題はここからだ。

通話ボタンをタップし、魔王（父）と対話を図る。

「も、もしもし……」

『やあ、お取り込み中悪いね』

「い、いや。大丈夫ってか、そんな取り込んでねえよ。それでなんか用、ですかね……」

（え、あの天宮さんが敬語を?!）

『いやね、輝がいつ帰ってくるか知りたくてね。いつ、帰ってくるんだい?』

「そ、そろそろ帰る……」

『本当かい？それじゃあ、彼女さんも連れてくるといいよ。丁度晩ご飯も出来たから、食

べてもらって行こう。楽しみにしているよ、輝』

「オ、オー。オレモ、タノシミダナー」

そう言つて、通話終了ボタンをタップし、携帯をポケットにしまう。

「お、おい。相談があるんだけどよ……」

「天宮くん、大丈夫？ 凄い汗だよ？」

「あんだ、風邪でもひいたの？」

「ち、違えよ。親父からだ……お前ら、俺ん家に行くぞ。め、飯を食いに……」

「え!? 良いんですか!? 行きます行きます!」

「あ、安心しろよ! お前らの命は守ってやるからよ……!」

「「「え?」」」

「そ、そうと決まれば善は急げだな! い、行くぞおら」

後半声が裏返っていたが、何とか誤魔化したハズだ。一抹の不安を抱え、六人は魔王の城（自宅）へと向かうのだった。

「……………」

「ね、ねえ天宮くん。本当に大丈夫? 凄い震えてるよ?」

「し、心配すんな……なんなんだよあの親父の威圧感は……! 衝動的に連れて来ちまったけど大丈夫だよ……!? こええ、こええよ……! 震えんじえねえ! この足が!」

バシバシ自分の足を叩き、何とか気合を入れる。そして、玄関のドアの取っ手に手を

かけ思い切り開けた。

「た、ただいま帰りやがりました……」

帰りやがりました

「おかえり、輝」

「ひえ……」

「僕の勘違いかな？ 同じ女の子が五人もいるね。まあ、それはこれからじっくり聞くとして外で話すのもなんだ、どうぞ中に入って」

「……お、お邪魔します」

ただなら雰囲気を感じ取ったのか、五人の顔が緊張の色に染まり上がっている。

輝と五人姉妹は無事、魔王の城を攻略して生きて帰れるのか!?

次回へえ続く

E p. 04 天宮家、それは魔王の城 2

カチ、カチ、と時計の秒針が刻む音だけが静寂のリビングに響く。テーブルには豪華な料理が並べられ、眩しく光り、いい匂いが鼻をくすぐった。美味しそう。早く食べたが今はそれどころではない。問題はその華やかしいテーブルを挟んで座るこの魔王だ。こいつを何とかしなければ、食^クべ^リる事は出来ない。

にっこり笑顔を絶やさない魔王こと父に挑むのは、『歩く口害』『悪口製造機』の二つ名を持つ勇者、輝である。後ろに控えるはボンコツボンボン従者五姉妹。

今、戦いの火蓋が切って落とされた！

(天宮史に残る決戦の舞台は、鈍色の雲に覆われています。今年もやって参りました、天宮 透こと魔王による、勇者断罪裁判。最早これを裁判と呼んでいいものなのではないでしょうか)

(ほぼ毎年行われていきますからね。勇者に黙秘権はないところを見ると、到底裁判と呼べるものではないです。一方的な尋問です)

(しかし、おかしな話ですね。悪の魔王による勇者の尋問なんて)

(全くですね。ですがこうして見ると、ほんつと勇者が滑稽に見えますねえ(笑))

(大人つてずるい、ホント)

(ずるいくらいが丁度いいのよ)

「率直に聞くよ。輝、彼女たちとはどんな関係なんだい？君の事だ、誑かしたーって訳じゃないんだろう？」

「あ、あたりめえだろ！コイツらは．．．．．コイツらはなあ．．．．．！」
「彼女たちは？」

(言っちゃえ！輝！)

(これで孫の顔も見れるわ！待てよ？五人も妻がいると言うことは、孫が五人以上になる事は確実!? うっひよおおお！たまりませんなあ！もう変な声しかでませえん！さあ、我が愚息よ！一夫多妻の日本人として、歴史に名を残すのよ！)

とんでもねえ母親である。

ゴクリ、と生唾を飲む二人。

笑顔のまま輝を見つめる父。

そして、何故か緊張の色に染まり上がる五姉妹。

冷や汗ダラダラの輝が絞り出した答えは――

「お、俺の．．．．．生徒だ」

「ん？生徒？」

笑顔が張り付いていた父の顔が、豆鉄砲を食らった鳩の如く間抜けた顔に変わった。「はああああああ!？」

突如、キッチンの横からずっと見守っていた母と姉が、華麗なスライディングで出てきた。

「だから言ったでしょ。お兄は大丈夫だった」

ソファの後ろから妹の優がひよつこりと顔を出し、父をジト目で睨む。一部の酔狂な人間からは涎垂らしものだろう。

優が五人姉妹の傍に行き、しゃがみ込んだ。

「すみません、お姉さんたち。変な茶番に付き合わせちゃって」

「か、かわいい……!？」

四葉と五月の目がキラキラ輝き、優を挟んで頬擦りをする。

結果として父親の勘違いによる、魔王の城攻略作戦は無事成功し、輝の怒声が響いたのは言うまでもない。

「いや、すまないね。君たちを疑うような事をしてしまった」

「い、いえ！大丈夫です」

五月が慌てて首を横に振り、一同も頷く。

「それにしても本当に五つ子なのね〜」

母の遥が食器を洗い終え、透の横に座る。

「あの、すみません。ご家族の皆さんに何も言わずに息子さんを……」

「いいのよ。元はと言えば、このバカがちやんと言わないのが悪いんだから」

スパアアアン！とスリッパで輝の頭をぶつ叩く。先程から不機嫌な輝の不機嫌パワ―が更に上がった。

「スリッパでぶつ叩くんじゃねえ！ぶつ飛ばすぞ！」

「うっさい！あんたが言うこと言わないからあんな事になったんでしようが!!」

もう一度スリッパでぶつ叩かれる。母親からの正論を言われ、言い返せず犬が威嚇する様に唸りながら睨む。

「もーそこら辺にしときなさいよー。姉妹ちゃん達が困ってんでしょー」

「うっせえんだよ！クソ姉貴！てめえは黙ってる！」

「うっせえのは輝でしょ！大体あんたはさっさと服着なさいよ！」

こんな時にも全くブレない凜が、今度は参戦した。真っ裸で。

「キャストオフして何が悪いってのよ！」

「普通に考えればわかんでしょうが！お客さんが来てんのよ!？」

「さっさとその土管腹しまいやがれ！」

「はあ!?!どこが土管なのよ!ボンキュツボンの間違いでしょツ!?!どちらかと言うと土管なのはお母さんの方でしようよ!」

「なああんですつてえええ!?!?!」

ギャーギャー言い合う三人を見て、優はため息をつき、父に視線を送る。

「さ、三人共?そろそろいい加減に……」

「『なんだてめえ!やんのかゴラア!?!』」

父の制止も届かず、まだ騒ぎあつてる三人に優の堪忍袋の緒が切れた。

「すみません、皆さん。ちよつと待つてて貰つていいですか?」

そう言つて席を立ち、取つ組み合い中の三人の目の前に立つた。物凄い怒気を携えて。

「いい加減にしなさいツツ!!」

重い鐘の音色が、天宮家から三回響き渡つたとき。

?????
 ☒???
 ????
 ??*??*
 ??*??*
 ??*??*

「(ぎ)馳走さまでした!」

「はい！また来てください！」

「んんん！優ちゃん可愛すぎるよお！」

「四葉さんくすぐったいですよ〜」

「一花さん、輝のことよろしく頼むよ」

「はい！お姉さんに任せてください！」

「頼もしいね。さ、輝。彼女たちをちゃんと自宅まで送るんだよ？」

「……………わーつてるよ」

結局、天宮家の茶番劇から始まり、くだらない事での喧嘩で終わった魔王の城攻略作戦は、無事幕を閉じた。すっかり外は夜の蚊帳に包まれ、道の街頭が等間隔を空け、道を照らしている。

「天宮さんの家族、美男美女だったね！ご飯も美味しかったし！」

「まあ、お姉さんの露出癖にはビックリしたけど」

四葉と二乃が楽しそうに会話をしているのを、聞きながら絆創膏を貼った頬を掻く。

「輝くんのお父さん、カツコイイね。あー、私も結婚するならあんなカツコイイ人がいいなー」

「一花はまず、ズボラな所を直しましょう」

「たはは……………」

「ヒカル、ほっぺ痛いのか？」

「別に、何ともねえよ」

「ほんとにー？」

「ホントだっつの」

三玖に心配され、一花にからかわれながらもこれで少しは親睦ぐらい深められたと思
うと、今日くらい好き放題言わせといてもいいかと思えた。

程なくしてタワーマンションに着き、後は別れるだけ。バカ騒ぎで火照った体もいい
感じに冷めてきた。

「天宮くん、今日はありがとうございました」

「こっちこそみつともねえとこ見せちまって悪かったな」

「いえ、凄く楽しかったです」

「天宮さん！また連れてって下さい！」

「おう」

「今日のお礼に、今度は私のお菓子を食べさせてあげるから感謝しなさいよ」

「期待しないでおく」

「なんでよッ!？」

「お父さんに輝くんのご任されたから、何かあったらお姉さんに相談してね」

「うっせえよ、姉貴ぶんなボケ」

「私にだけ冷たい……」

「明日からまた勉強やんだから、真面目に授業受けんだぞ。今日はガリ勉野郎が都合で来れなかったけど、明日から来るらしいからしごかれんの覚悟しとけ」

「ええ!?! アイツも来るの!?!」

二乃がブツブツ文句をたれながら中に入り、それに続くように各々も続く。それを見送り、全員がエレベーターの中に入ったのを確認し、踵を返そうとした瞬間、視界の隅に人影を捉えた。

「……お前、何してんだよ。アイツら行ったぞ」

一人だけ、ポツンと残っていた。

「ヒカル」

「あ? なんだよ」

「明日も、よろしくね」

「んな事言うために、わざわざ残ったのかよ」

「うん。ちゃんと聞いたかったから」

『明日も』じゃねえ。『卒業まで』、だ。体冷やすからとつとと入んな」

「うん……! またね」

中に入ろうと背を向けた瞬間

「じゃあな。三玖」

と、確かに自分の名前を言う声が聞こえた。

「……………！」

三玖は後ろを振り向くが、輝の背中はまだもう遠くであり、声は恐らく届かないだろう。

「やつと、呼んでくれた……………」

つい嬉しくて、口元が緩む。

しかし、そこで異変に気づく。

「あれ……………今日、こんなに暑かったかな……………」

自分の頬が赤くなっているのに気づかず、空を見上げる。満天の星空、明日はいい事がありそうな気がした。

「バイバイ、ヒカル」

口から零れた、小さな言の葉。慌てて周囲を見渡すが誰もいないことに安堵する。

まだ熱が冷めない顔に戸惑いを覚えつつも、妙な心地良さに目を瞑った。

三玖の中で、輝の存在は確かに大きくなりつつあるのに気づくのは、もう少し先の話。

一方その頃 天宮家では

「ないよお!?!ブラないよお!?!」

「凜! うっさいわよ!」

露出教・教祖、ブラ、無くすッ!!

E p. 05 輝の憂鬱

「君から電話を寄越すなんて珍しいね」

『昨日、娘たちが君のところでお世話になったみたいだからね』

「なに、気にしなくていいさ。まあ、僕の息子を勝手に家庭教師にした事については深くは問わないよ。君には君の考えがあるだろうからね」

『それについては申し訳ないと思っているよ、透』

「はは、何も言わないのは昔から変わらないね、マルオ。そう言えば、勇也の息子さんも雇ったらしいじゃないか」

『まあね。学年首席の上杉くんと次席の天宮くんの二人体制で娘たちの家庭教師をやつてもらっている』

「磐石の備え、つてところかい？」

『娘たちには幸せになってほしいからね』

「そうだね。子を持つ親としてはそれ以上の願いはないよ。でもね、マルオ……。自分の考えや理想を、子供たちに押し付けるのだけはやめろ。今回の件もそうだ。お前が何の考えで家庭教師を勇也と俺の息子にやらせているのか知らないけど、自分の子供

「たちに会いに行ったりはしてるのか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「お前の事だ、適当な理由を付けてロクに会ってないんだろ。そういう所から改めるべきなんじゃないか？これは親友として、同じく子を持つ父親としての忠告だ、マルオ。お前のソレは、間違っている」

いつも温厚な透が、口調を変えるのは極めて珍しい。

『口調が変わっているよ、透』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『ーーーー忠告、痛み入る。そうだね、近々会いに行こうと思う』

「すまないね、少し熱くなりすぎたよ。君の家庭だ。他人がとやかく言う権利はないけど、どうか心に留めておいてほしいな」

『恩に着るよ、透。それでは、失礼するよ』

「ああ、それじゃ」

通話終了ボタンをタップし、軽く息を吐いた。

(俺とした事が、余計なお節介を・・・・・・・・・・)

そうだ。彼とは確かに学生時代からの友人だ。だが、それだけ。いくら友人とはいえ、他人の家庭事情まで首を突っ込むのは御門違いもいいところ。悪い癖だ。

自責の念に駆られ、思わず苦虫を噛んだような顔になってしまう。すると、自室のドアが開いた。

「親父、飯できてる」

「ああ、今行くよ」

自慢の息子が呼びに来たので、素直にそれに従う。

おもむろに頭に手を置き撫でた。

「………？なんだよ、親父」

「いや、なんでもないよ。つい、撫でたくてね」

「気持ちわりいな」

「はは。手厳しいね。今日も彼女たちのところに行くのかい？」

「まあな。一応バイト料貰ってっからその分働かねえと」

「そっか」

「昨日は悪かった。何も言わなくて」

「もう気にしてないよ。ちゃんと教えてあげなさい」

「おう」

「それはそうと、輝は彼女たちの誰が一番好きなんだい？」

「好き？何言ってるんだ？あいつらは生徒だぞ」

「いや、僕が言っているのは……」

「あのボケカスポンコツ共にペンを握らせんのも一苦労だつーの。そんな奴らを好むやつなんざいいねえよ。人の言うこともロクに聞きやしねえ」

(酷い言いようだね……)

「輝はもう少しそつち方面にも気を配った方がいいね、これは」

「あ？わけわかんねえことほざいてねえでさつさと食えよ」

「はいはい」

(これは相当骨が折れるな……頼んだよ、一花さん)

そう心の中で祈りながら、スープを啜った。

うん。ちべたい。冷めてら。

———
家庭教師開始 二日目

「ふああ……」

「だらしないぞ」

「うつせえよガリ勉強野郎。あー首が痛てえ。日曜もカテキョーで潰れんのクソだな」

「全くだ。今日は一日中勉強出来ると思ったのに」

「クソ真面目かよ。気分転換に恋とかして来いよ」

「恋……?」

「おう」

何やら黒いオーラを出しながら風太郎は輝に詰め寄った。

「アレは学業から最もかけ離れた愚かな行為だしたいやつはすればいい……だがそいつの人生のピークは学生時代となるだろういいかそもそも恋愛というのはだな——」

「お前、相当性根が腐ってやがんな」

一人で呪詛のようにブツブツ喋る風太郎を他所に輝はスタスタと歩いていく。

目の前にタワーマンションを捉え、マンションの入口付近では案の定五姉妹がお出迎えをしてくれた。

「お前ら毎回毎回外に出てきて楽しいか?」

「だって上杉さんオートロック分らないんですもん」

「庶民の俺とはかけ離れた産物だからな」

「天宮!はい、昨日言った通り、お菓子作ったわよ」

「わりの、俺甘いモン苦手なんだよ」

「ふふんっ、安心しなさい。そんなこと、昨日の内に優ちゃんから聞いてるわ！だから食べてよね！味のしないクツキー！」

「睡眠剤とか入れてたら殺す」

「し、失礼ね！入れてないわよ！」

「あつそ……サンキューな、二乃」

「はわっ……！」

（時間差でお礼と名前言うのやめなさいよ……！このバカ……！）

心の中で慌てふためく二乃と対照的に輝はクツキーをもつきゆもつきゆ食べる。

「うま」

「ヒカル、ヒカル」

服の袖をクイクイ引つ張られ、目線だけを動かす。相変わらず何を考えているのかわからない三玖が立っていた。

「これ、飲んで」

（こ、こいつは……大量破壊兵器の『抹茶ソーダ』じゃねえか……）

！こんなの飲んでんのかよコイツ。味覚ぶつ飛んでんのか……？）

「私のオススメ。ヒカル、飲んで」

「あ、後で飲むから」

「……………」

「睨むんじやねえよ！」

「……………ホント？」

「おう」

(ガリ勉野郎に飲ませるか。これくそ不味いんだよ)

心の中では失礼な事を言つても聞かれない事をいい事にそんな考えを浮かべる。
憂鬱な気持ちを抑え込み、今日もバイトに従事する。

—————

ああ〜心がびよんびよんするんじやあ〜

風太郎の今の気持ちを表すのに、これ以上の言葉があるであろうか。

勉強はやはり素晴らしいと再確認する。

「輝、大丈夫か？なんか顔色悪そうだぞ？」

「別にどうって事ねえよ。まあ、ちと体はだりいけど」

「何を軟弱な！」

一花がおもむろに立ち上がり、腕を組んで言い放った。

「私だって月一で重い日があるんだぞ？」

「知ったこつちやねえよ」

突拍子のない一花の発言に輝は真顔で返す。この長女には相当頭を悩ませられる。

「あれ？五月もそろそろじゃないっけ？」

「四葉！あなたは何を言っているんですか！男の子もいるんですよ！」

「重い日ってなんだ？」

風太郎が正にデリカシーの『デ』の字も掠らない質問を投げつける。

「そりゃあ、生んぐっ!?!」

「ヒカル、それ以上は止めておいた方がいいよ」

「そうよ、嫌われるのは上杉だけで充分なの」

「なぜ!?!」

「フータローも、結婚すればわかる」

「その前に、彼女の一人ぐらいでも連れてきなさいよ。あんたにそんな度胸があるならね」

「舐め腐つてからに……!」

「あつはは！輝くんは彼女出来たら、お姉さんビックリして死んじゃうよ」

「てめえは俺の何なんだよ……!」

一花の突拍子のボケに輝がすかさずツツコミを入れる光景は、最早恒例になりつつ

あった。五月は微笑ましく思うのと同時に、何かモヤモヤした言葉では言い表せない感情に襲われる。

(何でしようか、これ……)

考えても埒があかない事は知っているため、今はペンを握り机の上へ視線を戻した。

「天宮さん、ちよつといいですか？」

「ああ?どした」

「この英文なんですけどー」

(うんうん、コイツらも質問してくるようになって来たし、いい感じだな)

風太郎は心の中で頷きながら思った。輝も最初は嫌々やっていたが、今はさほど嫌でもないらしく、口が悪いのは相変わらずだがちゃんと五姉妹を導いていた。

「あ!天宮さん!私、二か国語喋れるんですよ!」

「へえ。バカなお前が日本語以外に何を喋れんだよ」

「えっへん!見ててくださいいよお!」

そう言つて四葉は、手を胸の前で握り目を潤わせ、猫なで声で輝に言った。

「はあうう……!ご主人様、ごめんなさいですう……!」

「国どころか次元超えてんぞ、それ」

「え!?ホントですか!?やったー!」

「褒めてるの？あれ」

「さあ……」

無邪気に喜ぶ四葉を、二乃と五月は苦笑いを浮かべる。

すると、一花が小声で話しかけきた。

「ねえ、輝くん」

「あ？」

「ちよつとお願いがあるんだけど」

「なんだよ」

「ちよつとお小遣い使いすぎちゃって……ごめん、お金貸してくれない？」

「はあ？金の管理ぐらいしっかりしろよ、ボケ」

「たはは……」

「いくらだよ」

「あ、千円で大丈夫だよ！ごめんね、本当」

「つたく……ほらよ。ちゃんと色つけて返せよ」

財布から千円札を取り出し、一花に渡した。

「うん！絶対返すから！色つけて！」

あ、これ絶対意味分かってない、と心のどこかで思ったがあえて教える必要もないと

思いそのままにした。

それから風太郎の小言を聞かされながら続いた勉強会は順調に進み、今日も無事解散となった。

次の日の放課後 中野家、リビング

「ねえ、輝くん」

「ああ？」

声が出た方を振り向いた輝の顔が、一瞬にして真顔になった。

何故なら、胸の谷間に千円札を挟み前屈みで照れくさそうにこつちを見上げる一花がいたからだ。

「い、言われた通り色つけたよ………?」

「違う、そうじゃない」

予想の斜め上を行く彼女の思考に、輝は重いため息をついた。

次回予告

ついに待ちに待った花火大会

ガス抜きがてらに五姉妹と訪れた輝と風太郎の前に新たな壁が立ちはだかる！
一花を狙う、怪しいオヤジの正体は!?

次回

打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？でもやっぱり私は X p e r i a
ご期待ください

E p. 06 夏の夜 恋の始まり

「今日は待ちに待った花火大会！お姉ちゃん楽しみ！」

「夜からなのに随分とテンション高いね、お姉」

「知能が猿以下たあこの事だなあおい」

「なんとも言いなさあい。今日の私はどんな悪口にも動じないのだから！」

「ブス」

「殺すツツ！」

「ブレブレじゃねえか」

「優は誰かと行くの？」

「遙が尋ねると、目線を逸らしながら言った。

「実は……クラスの男の子に誘われて……」

「なんとまあ可愛らしい。ほっぺが真っ赤つかですよ。」

「あら」

「おや」

「へえ……」

「そう……」

遙、透、輝、凜の目がギラ付き、優はしまった！と言わんばかりに口を塞ぐ。しかし、時すでに遅し。言質はもう取られている。

「優にも春がとうとう訪れたのね」

「はっはっは。親冥利に尽きるねえまったく」

「いい事じゃねえか。なあ姉貴」

「ほんとよ。羨ましいわ〜」

（あ、よかった……気のせいだったみたい……）

安堵の息をつくが、悲しいかな。やはりこうなる事は避けられなかったようだ。四人が一齐に立ち上がった。何やらサングラスと黒い帽子を持つて。

「……四十秒で支度するんだ。焼き討ちに行くよ」

「俺の妹に手え出すたあいい度胸じゃねえか。血祭りに上げてやらあ!!」

「狙撃はお任せ下さい」

「腕がなるなあ!」

（デスヨネー）

何となくそんな気はしてたけどさ。

優が遠い目で物騒な物を取る野蛮人たちを見る。

「行くわよ野郎ども！優を誑かした小僧に、絶対本懐を遂げさせるなあ!!」

「出陣じゃああああ!!」

「ふふふ、今日はいい夢が見れそうだよ……!!」

「もういい加減にしてええええええ!!」

今日も天宮家は平和です、おばあちゃん

b y 天宮 優

輝は真つ赤なもみじ色に染った頬を擦りながら通学路を歩く。

「いってえ………優のヤロオ、思いつきり打ちやがって………だつてしようがねえだろ、兄貴としてはお前に近づくクソ共を駆除する役目が………」

ブツブツ独り言を言いながら交差点で信号を待っていると見知った人物が片手に飲み物を持ちながらケータイを弄っていた。

「あ、輝くん！おっはー!」

「何がなんでも本懐だけは阻止しねえと………!」

「あ、あれ？輝くん?」

無視されたのが不服なのか、頬を膨らませ輝の目を手で覆った。

「ああ!?なんだ!?前が見えねえぞ!?」

「誰でしょくか。当ててみて」

「一花か、さつさと手を退けろ」

「当たり前!おはよ!輝くん」

「おう」

「つてどうしたの、そのほつぺ。真つ赤だよ?」

「優に打たれた」

「え!?優ちゃんに!?もう、今度は何したの?」

「焼き討ちに」

「え．．．．．?や、焼き討ち．．．．．?」

「うし、決めた．．．．．一花」

「う、うん?」

輝はガシツと一花の肩を掴み、顔を近づける。

「行くぞ」

「ど、どこに．．．．．?」

（わわわわ、顔近いよお．．．．．!これって期待していいよね．．．．．?いいんだよね．．．．．?うん、私も覚悟を決めたよ!さあ、どんと言つてきなさい．．．．．）

!

「今日は花火大会あつたよな」

「う、うん」

「今日の勉強会はなしだ。花火大会に行くぞ」

「え、あ、うん。それはいいけど……えっと、その、二人つきりで、ですか……？」

「なわけねえだろ。ポンコツ共とガリ勉野郎も連れてくんだよ」

「あ、ああ……！だよね、そうだよねっ！」

(そうなりますよねえ……まあ今日は仕事入ってないからいいけどさ……)
(何をビビってやがる、天宮輝！そうだ、俺はアイツの兄貴だ！優、お前の純潔は兄貴が守ってやつからな！)

怪しく笑う輝と、見て分かるほど落胆する一花。傍から見れば、物凄く奇妙である。

「ねえママ。あのお兄ちゃん、何も無いのに笑ってるよ」

「バカ！見ちゃいけません！」

それぞれの思惑を含んだ波乱の花火大会が幕を開けようとしていた。

?????
☒??
??
??*??
??*

「それで、なんでお前が正座させられているか分かるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

場所は中野家 リビング。

放課後早速家に帰ろうとしたところを風太郎に見つかり、無理やりここに連れてこられた。

先に帰り、浴衣に着替えていた五姉妹も見つかり『風太郎には内緒』という約束をまんまと奴らは裏切り、こうして正座をさせられている。

「俺の目が黒い内は、好き勝手にはさせないからな」

「鬼畜生が・・・・・・・・！！」

「何かよそよそしいと思っていたら、花火大会に行こうとしていたなんてな。家庭教師でありながら」

「コイツらにも、ガス抜きは必要だろうが・・・・・・・・」

「まあ、そこは認める。だが、まだ時間が有り余っているだろ！勉強せずして何をする！職務放棄をしたお前は罰として、コイツらの勉強が終わるまで携帯没収だ」

「あー！ずるいやめろよ返せよお〜！」

(ヒカル、かわいい・・・・・・・・)

一時間後——

「やつと終わったあ！」

「花火って何時から？」

「19時から20時まで」

「じゃあまだ一時間あるし、屋台行こー！」

花火大会の開催場所は思っていた通り物凄い人混みだった。屋台から漂う食べ物の匂いに風は思わず生唾を飲み込んだ。

「あれ？姉妹ちゃんたちじゃない」

「あー凜さんだー！」

四葉が手をブンブン振る方には、軽い服装の凜が『やつほー』と言いながら歩いてくるのが見えた。

(誰……!?!あの美人!?)

風太郎は心の中で驚愕した。長くサラツとした髪。柔らかそうな唇。そして何より目を引くのがあの胸。何もかもが風太郎にとっては刺激が強すぎた。

「元氣してたー？あれ、君は？」

「う、上杉風太郎でひゅー！」

「あー！輝ともう一人の家庭教師クン？いつも輝がお世話になってるねー」

「い、いえ！」

「なに動揺してんのよ、気持ち悪い」

「し、してねえし！」

「はー、浴衣姿も可愛いわー」

「んな事より、姉貴」

「わーつてるわよ、優の事でしょ？」

輝と凜はコソコソと話ながら周囲を見渡す。

「な、なあ、五月。あの人は……」

「あ、上杉くんは初めて会うんですよね。天宮くんのお姉さんですよ」

「え!?!輝のお姉さん!?!」

「そうですよ、すごい美人さんですよね」

すると、話し合いが終わったのか輝と凜がこっちに来た。

「わりの、ガリ勉野郎にはまだ紹介してなかったな。うちの姉貴だ」

「どもー」

「えつと、社会人、なんですか……?」

「違えよ、大学一年生」

「え!?!凜さん大学生だったんですか!?!」

『ビックリです……』と四葉が驚いた用に声を上げた。

「あ？言つてなかったか？東大の一年生だつて」

「と、東大!?!」

「そうよ」

「と、東大つてあの東京大学の!?!」

(超エリートじゃねえか……!)

「ちよつと、天宮」

「あ？なんだよ」

「あれ。なんか男たちに絡まれてるの、優ちゃんじゃない?」

「ああ!?!」

輝と凜が同時に振り向いた。そこには、浴衣に着替えた優がガラの悪い男三人に絡まらていた。何やら必死に抵抗しているみたいだが、どうも聞き入れてくれないようだ。

「わりい、お前ら。ちよつと待つてろ」

「ごめんね。ちよつと、シメてくるから」

「え?し、シメ……?」

風太郎が動揺しているのを他所に、五姉妹は『はい』と言っている。

(え!?なんでお前ら驚かないの!?)

「い、いい加減にしてくださいッ!」

「いいじゃんか、俺たちと遊ぼうよ」

「どうせ一人なんでしょ?」

「俺たちと遊んだ方が余つ程楽しいよお」

三人の内の一人の男の手が伸び、優は咄嗟に目を瞑った。

(助けて…………お兄、お姉…………!)

「ふへへへ…………可愛いねえ…………」

「よお」

「あ?」

男がお楽しみを邪魔されたのか、イラついた顔で振り向いた先には――

「楽しそうだなあ、兄あちゃんらよ」

「あたしらとも遊んでくれない?」

「ひえ……………」

手をゴキゴキ鳴らし、青筋を浮かべた輝と凜が笑みを浮かべていた。

「あ、あの……………」

「ご、ご家族の方ですか……………」

「よ、よかった！この子、迷子になってたみたいなんで……！そ、それじゃ俺たちはこれで——」

「死に晒せええええええ!!」

「ほぎゃあああああ!!」

三人に一発ずつパンチを入れると、逃げるように走って行った。

「輝！塩撒け塩！」

「失つせろ！クソ共があ！」

「ちよつと兄ちゃん！それ店の塩！」

振り撒き終わったのか、丁寧に塩を返す姿が何ともシユールで、優は思わず吹き出した。

「お兄、お姉、ありがとう……」

「気にすんな」

「優の純潔は輝とあたしで守るからね！」

「お前、そーいやー男と来んじやなかったのか？」

「えへへ、断つたよ」

「あら、なんで？」

「まだお兄とお姉に甘えてたいから、さ……ダメ、かな……？」

「……………」

いつもはあまり甘えて来ない妹に、兄と姉のハートは撃ち抜かれてしまったようだ。

「抱きしめてもいいですか」

「止めてよ変態」

「あ、はい」

凄まじい手のひら返し、手首が捻じきれんばかりである。先程の可愛らしい妹はどこに行つたのだろうか。

「あー二乃さんだ！」

落ち込んでいる二人を他所に、優は五姉妹の所に行つてしまった。

あーね、思春期だもんね仕方ないね。

(今度は美少女!?)

「あ、上杉さんですよね? いつも兄がお世話になってます」

丁寧にお辞儀をされ、風太郎も咄嗟に頭を下げた。

「ちよつと上杉! 優ちゃんのこと変な目で見ないでよ!」

「見てねえよ!」

二乃が庇うように抱きしめ、残りの四人も二乃と同じように優に抱き着き、上杉を睨む。

(うわあ、フカフカだ……)

優も押し寄せる五つの豊満な胸に、顔がキラキラしている。うらやま。

「俺の妹だ」

「妹さんか。つかぬことを聞くが、頭もよろしいの……?」

「それは知らねえけど、ついこの間中学の全国模試で一位になったとか言ってたな」
(え、何なの。この顔面偏差値高いハイスペック姉弟きょうだいは……ん?)

風太郎の携帯に着信が届いた。相手は妹のらいはからだった。

「悪い、輝。妹から電話来て今すぐに帰らなきゃならん」

「……家の事情か?」

「……まあ、そんなとこだ」

「わかった。アイツらには適当に言っとくから行ってやんな」

「悪いな」

そう言つて風太郎は駆け足で帰っていくのを横目で見送り、視線を戻した。

「おら行くぞー」

『何食べよつかー?』『綿あめ一択』『リング飴!』『チョコバナナ』『優ちゃんは何食べる?』と楽しそうに会話する五姉妹と優の後を輝、凜が続く。

「花火大会なんざ何年ぶりだ?」

「うーんと、五年とかそこらじゃない？最後に行ったのが優がまだ小学生の頃だから」
「だからあんなはしゃいでんのか」

「嬉しいのよ。今までは優が誘ってもあんたが行かねえの一点張りだったから」
「.....」

優の顔を見ると、確かに小学生の頃によく見せていたとびつきりの笑顔だった。

「悪かねえな、こーゆーのも」

すると、優が何かを持って近寄ってきた。

「お兄、見て！四葉さんが取ってくれた！」

「食えんのか、これ」

「あんだこれ金魚よ」

五つの袋に金魚が大漁に入っていた。

「後これも！」

「いや、それ今日一番要らないやつ」

『花火セツト』と書かれた袋を大事そうに抱え、満面の笑みを向ける妹にため息をつきつ
つも優しく頭を撫でた。

それを遠くで見ていた五姉妹は微笑ましく思うの同時に羨ましくも思った。

「天宮くん、あんな風に笑うんですね」

「私たちの前じや全然笑わないのに」

「ちよつと、優ちゃんが羨ましいです」

「あれ？そう言えば一花は？」

四葉の言葉に全員がキョロキョロ見渡す。

「三玖もない……」

「もうすぐ花火が始まるのに……」

「どうしたお前ら、葬式帰りみてえな顔しやがって」

「あ、天宮くん！一花と三玖が……！」

「まさかはぐれちまったのか？」

「どうしよう。花火が……」

「お前らはここで固まつてろ。俺は一花と三玖を探してくる。優、コイツらと一緒にい

ろよ」

「うん、早く行ってあげて」

輝は来た道の人混みを避けながら戻って行った。

（へえ。輝、あんた何だかんだ言っちゃんちと気にかけてんじやん）

凜は笑みを浮かべながら輝の背中を見送った。

????
☒??
??
??*??
*
*
*

輝は人混みを掻き分けるが、それらしい人物が全く見当たらない。

「クソが……どこをほつつき歩いてやがる……!」

また人混みに入り、注意を払いながら周囲を見渡すと人混みの間から一花の姿を捉えた。

(見つけた……!)

一花を目指し、雑踏を掻き分ける。

「はい、また後でかけ直します。はいー!」

「おい! てめえどこをほつつき歩いてやがった! 早くアイツらのとこに戻んぞ!」

一花の腕を掴もうと使用とした瞬間、横から別の手にそれを防がれた。

「ああ?」

「君、誰?」

「てめえこそ誰だよ、クソオヤジ」

髪をワックスで固めたような髪型の中年男が輝を凝視した。

輝は一花を見るが、一向に目を合わせようとしない。

「一花ちゃんと、どういう関係?」

「うっせえよボケが。てめえこそ、そのアホとどうい関係なんだよ」

「それは————」

「ヒカル……?」

「あ?」

後ろを振り向くと、そこには三玖が息を切らしながら輝を見ていた。

「お前、三玖か? つたく、はぐれてんじゃねえよ」

「ご、ごめん……」

「三玖は見つけた。後はてめえだけだ、クソおん……どこ行きやがった!？」

さっきまでそこにいた一花と中年男が消えていた。輝の脳裏に嫌な予感が過ぎる。

（幾らアホとは言え、自分の身体を売するようなヤツじゃねえはずだ、アイツは……
!）

「おい! あのアホを追いかけんぞ!」

「あ、待って! 痛つ——」

「お前、その足……」

「足、踏まれちゃって……ヒカルは先に行つて」

赤く腫れた足を庇いながら歩く三玖を見て、輝を舌打ちをしながらしやがんだ。

「ほら、乗れ」

「え？」

「いいからさつきと乗れ、ぶっ飛ばすぞ」

「はい……………」

恥ずかしそうに三玖が乗ったのを確認すると一気に持ち上げた。

「えつ……………」

「おい、そつからあのアホは見えるか？」

「一花……………？ 見えないけど……………このまま追いかけるの？」

「いや、お前を一回アイツらのところに連れてく」

そう言つて三玖をおんぶしながらまた来た道を戻つた。

道中視線が痛かつたが今は気にしていられない。

「それで、一花を見かけたのは本当？」

「ああ。俺に気づいてんのに目も合わせやしねえ。あの髭のオヤジとどこかに行きやがった。なんか知らねえか？」

「ううん……………あ。前に一花が髭の人の車から出てきたの見たかも……………」
「ますます嫌な予感がすんな……………」

一先ず三玖を固まっている他の面子の所に置き、また人混みの中に飛び込む。

いい加減人酔いしそうだ。

「あんのアホ……!どこに……!」

「誰か探してるの?」

「ああ?んだよ誰だー!っ!てめ、一……」

「こつち来て」

「ああ!?!」

一花に手を引つ張られるがまま、連れて行かれる。

「おい!いい加減にしろよ!どこに行くつもりだ!アイツらのとこに戻んじやねえのか

よー」

「はは。いーからいーから」

「……?」

一花に連れてこられたのは建物の一角、路地裏だった。

「おい、てめえには聞きてえ事が山ほど……」

そう言いかけたところで、一花の人差し指が輝の前に伸びる。

「さっきのことは秘密にしておいて」

「ああ?」

「私はみんなと一緒に花火を見られない」

「……ちゃんと理由があんだらうな、アホ女」

「急なお仕事頼まれちゃって……だから花火は見に行けない」

「仕事だと……?」

「ほら、同じ顔だし一人くらいいなくても気づかないよ?ごめんね、人待たせてるから」
「おい、待てよ。ちゃんと説明しやがれ。仕事ってなんだよ。てめえはコソコソ何してやがる」

「……………なんで?」

「あ?」

一花が壁に手を付き、顔を近づける。

「なんでお節介焼いてくれるの? 私たちの家庭教師だから?」

「教師が生徒の面倒見んのはあたりめえだろうがよ、アホが。おら、とつと戻んぞ」

今度は輝が一花の手を引いて路地裏を出ようとしたが、

「あのオヤジ、てめえと一緒にいたやつじゃねえか」

「あの人、仕事仲間なの」

すると、中年男が輝と一花の居る路地裏の所にやってくる。

「チツ!こつち来やがった!」

「どうしよう!仕事抜け出してきたから怒られちゃう!」

「んな事知るかよ!とりあえず奥から逃げれば……………」

「あー！間に合わないよ！」

中年男が路地裏の中を見ると、そこには抱き合っているカップルがいた。

「？ 気のせいかな。よっこいしょ」

（クソが！そこに座んのかよ！）

近くに置いてあつた木材の上に腰をかける。

「……………おい」

「ん？」

「いつまでこうしてればいいんだよ」

「ごめん。もう少し」

「……………クソが」

「私たち、傍から見たら恋人に見えるのかな？」

「知らねえよ」

「ふふつ……………本当は友達なのに悪いことしてるみたい」

「変な気起こすんじゃないぞ」

「お、起こさないよ！」

「もしもし」

すると、近くで座っている中年男が電話をしだした。輝を耳を済まし、電話の内容を

聞く。

「少しトラブルがあつて……撮影の際は大丈夫ですので」

「撮影？ おい、一花。お前の仕事つて……」

一花は小さく息を吐き、観念したかのように喋つた。

「実はあの人はカメラマンなの。私はそこで働かせてもらつてる」

「カメラアシスタントつてやつか？」

「……うん。良い画が撮れるように試行錯誤する。今はそれが何より楽しいんだ」

(コイツ……)

「大切な時期に、んな事して大丈夫なのかよ。お前たちは勉強しなきゃ進学すら怪しいつてのに」

「だって、信じてるもん。君のこと」

「あのなあ……」

「一花ちゃん見つけた！」

「ツ！クソが！」

一花の手を引いて路地裏をダッシュ出かける。

しかし、いざ出てみればそこにはあの髭オヤジ。気持ち悪い。

「君は……なんだ、君は……君はこの子の何なんだ!？」

「コイツは俺の生徒だ！いい歳したオヤジがガキに色目使ってんじやねえ！」
 (ガキって……!!?)

「い、色目なんてとんでもない！その子は大切な若手女優なんだ！」

「……は？」

確かにこの瞬間、時間が止まった。

「カメラで撮る仕事って、そっちのことかよ」

一花の顔を見ると、若干渋い顔をしていた。

????
 ☒??
 ??°
 ??*??*
 **

「行こう、一花ちゃん」

「おい、待てよ！」

「止めないでくれ。君の生徒を連れ回してしまったのは本当に済まなかったね。でも、

一花ちゃんは今から大事なオーディションがあるんだ」

「んな事知るかよ！一花、お前ら五人にとって花火は大切なもんじゃねえのかよ！」

「……あの子たちから聞いたの？」

「ああ、前にな。死んだお袋さんとの大切な思い出なんだって」

「……みんなによろしくね」

「一花ちゃん、急ごう。会場は近い、車でなら間に合う」

そう言つて、一花は中年男と一緒に歩いていった。

輝は時計を見る。花火の打ち上げまであと15分。なら迷う必要などない。

「そうは問屋が卸さねえぞ……！」

輝はまた駆け出した。

????
??
??*??*
??*
??*

一花はバス停で車の迎えを待っていた。

本当は申し訳ないと思つている。

だけどー……

(私、弱いな……)

一度決めた事に、揺らぎを感じている。

だが、やっとここまでできたのだ。ここで諦めるわには……

「おい！クソ女ツ！」

「ツ！」

振り向くと、階段の最上段に肩で息をする輝がいた。

「あ……？あのオヤジはどこいった……？」

「車取りに行つてるとこ」

「そうか……」

そう言つて輝は一花の所まで行くと、持っていた紙袋を押し付けた。

「食いもん、持つてけ」

「えっ……」

「なんも食つてねえだろ」

「あ……」

一花は紙袋を受け取ると、輝に向き直つた。

「ヒカルくん、もう一度聞くね」

一呼吸置いて、輝の目を射抜くように見た。

「なんで、ただの家庭教師の君がそこまでお節介焼いてくれるの？」

「パートナーだからに決まつてんだろ、ぶち殺すぞ」

「……」

その力強すぎて、最後が犯罪予告になりつつある言葉に一花は笑みを浮かべ、輝に一冊の本を差し出した。

「あ？何だこれ……」

「台本。半年前に社長にスカウトされて、この仕事に就くことが出来たんだ。それからちよくちよく名前のない役をやらせてもらってた。結構大きな映画の代役オーディションがあるって教えて貰ったのがついさっき。いよいよ本格的にデビューかもってと」

「それがお前のやりてえことか」

「そう！せっかくだから練習相手になってよ。相手役がヒカルくんね」

「しゃーねーな」

（何だかんだ言って、付き合ってくれるんだ）

『ああ!?教科書みてえだなおい!』と文句を垂れながらパラパラ台本をめくる輝にペー
ジを指定し、そこを開かせる。

「うし、行くぞ」

「うん。お願い」

「あーつと……卒業おめでとう」

「先生、今までありがとう」

それはよくある学園モノの映画で、クライマックスの感動の卒業シーンだった。

「あなたが先生でよかった。あなたの生徒でよかった」

「・・・・・・・・・・」

「あれっ？もしかして私の演技力にジーンときちゃった？」

「寝言は寝て言え、はっ倒すぞ」

「ですよねー」

すると、遠くから一台の車が走ってくるのが視界に入った。

「あ、社長の車だ。じゃあね、私行くよ」

「これだけでいいのかよ」

「うんっ。とりあえず、役勝ち取ってくるよ」

「—————おい」

輝が一花の頬を思いつきり挟んだ。

「お前、演技の才能ねえだろ」

「ヒカルくんはちよつと遠慮って言葉を覚えよつか」

「うっせえよ。んな事より、その作り笑いやめろ」

「ははは・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「余裕あるフリして、なんであの時震えてたんだよ。カマトトぶんじゃねえ」

「・・・・・・・・・・」

それは路地裏で抱き合っていた時の事を言っているのだと理解するのに時間は掛か

らなかった。

「……この仕事を始めて、やっと長女として胸を張れるようになってきたの。一人前になるまであの子たちには言わないって決めてたから。花火の約束があるのに、最後まで言えずに黙って来ちゃった。これでオーデイション落ちたら……みんなに合わす顔がないよ」

「まだ受けてもねえのに勝手に決めつけてんじやねえ」

「へえ………つつきり怒るかと思つたのに………」

「怒らねえよ。お前がやりてえ事ならやれるとこまでやつてみりゃいい」

「ヒカルくん………」

「生徒の背中を押すのも、教師の務めつてヤツだ」

確かにその時、

トクン……

と、一花の胸が跳ねた、輝の笑顔を見て。

「一花ちゃん、何やってんの！早く乗って！」

「は、はい」

「気張って行けよ！一花ア！勝ち取ってこい！」

「………っ！ うんっ！」

そう言って、一花は車に乗り込み去って行った。

夜空を彩る大輪の花。それはまるで、彼らの未来を暗示しているようだった。

「—————」

一花は車に揺られながら、渡された紙袋をさらに抱きしめる。

『食いもん、持ってけよ』

『生徒の背中を押すのも、教師の務めってヤツだ』

額に僅かに浮かぶ汗、上気する頬。

あんなになるまで自分を探してくれたと思うだけでも胸がいっぱいになりそうだった。

それに最後のあのエールとも取れる言葉—————どうやら彼は、女の子を本気にさせるのがお得意のようだ。

「ふふ………覚悟してよね、ヒカルくん………」

そつと瞼を閉じた。

「へっクシ………! ああ、誰か噂してんのか………?」

当の本人はまだ気づかない。

—————

次回予告

異例のカリキュラム変更による二学年全組対抗のバスケットボール大会が開催される。野蛮の集団、輝たちのクラスは血気盛んに意気込む中、とある姉妹の中でも新たな戦いの狼煙が上がる。

「かちこみじやあああああー！」

叫ぶ武田———！

「他のクラスの奴なんざ素数にしてやるぜえ！」

ほざく田嶋———！

「アイツアムアツペエエン!!」

吠える小野寺———！

「この時の私の気持ちを答えなさああい~~い~~???!」

どうした山田———！

次回

とある学校の全組対抗

クラスマッチ

目覚めろ、その魂———！

E P. 07 とある学校の全組対抗十新たな試練

(そういうやアイツ、オーデイションどうなったんだ)

昨日の余韻はすっかり収まり、また同じ日常が戻ってきた。花火大会の喧騒がまるで嘘のように静まり返った開催場所は、朝のランニングをする人やペットの散歩をする人がちらほら伺える。

手に持った牛乳パックを啜り、今日も同じ通学路を歩く。

今日も馬鹿みたいに騒がしい奴らを拝まなければならぬことに頭が痛くなりそう
だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

昨日と同じ交差点で赤く光る信号機を眺めていると、後ろから軽く背中を叩かれた。

「おはよ、ヒカルくん」

「あ？んだよ、カマトト野郎か」

「カマトトって・・・・・・・・・・」

こちらも昨日と同じく、振り向くと一花がそこにいた。

笑顔を浮かべているが、若干疲れの色が出ているのが分かった。

「……昨日は、ありがとね」

「昨日?ーあぁ、あの事か。別に、気にすんな。お前こそ大丈夫かよ、目の下」

「目の下?」

「クマ。化粧で誤魔化せてねえぞ」

「え!?!うそ?!」

「嘘だよバーカ」

「~~~~~っ!嘘つかないですよ!」

「けっ」

信号機が青く光り、一人むくれている一花を置いて歩き出す。後ろからの視線が何やら背中刺さるがとりあえず無視を貫いた。

「ヒカルくんでも人をからかうんだね。お姉さん知らなかったぞ?」

「姉貴ぶんな、殴んぞ」

「はいはい」

クスクス笑う一花を一瞥し、小さくため息をつく。すると、徐ろに一花が口を開いた。

「昨日、あの後みんなに私の仕事のこと打ち明けたんだ」

「んー、なんか言われたのか?」

「ううん、特には。みんなびっくりしてたなー」

「そりやあな」

「でも、スツキリした！」

「てこたあ、オーデイションは受かったのか？」

「まあね！」

腰に手を置いてドヤ顔で言ってくる一花に少しイラツときたが、ぐつと堪えてやった。

「ガリ勉野郎に何言われつか楽しみだな、ポンコツ」

「そこなんだよね、問題は」

「まあ、背中を押しちまったのは俺だしな。言い訳の一つや二つくらいは考えてやんよ」

「そうだよ！背中を押ししたのはヒカルくんだよ。これはもう共犯だよね！」

「頼りねえ共犯者でクソも笑えねえけどな。留年だけはすんじゃねえぞ」

「大丈夫！留年しない程度には勉強頑張るから。勉強会してるんでしょ？放課後、また連絡するね。はい」

そう言つて携帯を差し出す。

「あ？ぶつ壊してほしいのか？」

「違う、そうじゃない」

メアド交換をと思つて差し出したのだが、それはどうやら伝わらなかったようだ。

学校に着くなり早々二学年のクラスが並ぶ廊下は賑わっていた。

輝は一花と別れ、自分の教室へと入るとやはりいつものヤツらに絡まれた。

「ちょおおおい！天宮！」

「んだよ朝っぱらから」

「一緒に登校してた女子、あれ隣のクラスの一花ちゃんだろ！」

「それがなんだよ」

「いつ知り合っただよ！」

田嶋が鬼気迫る勢いで輝に顔を近づける。

「んな事どうだっついていいだろ」

「いいや！良くねえ！一緒に魔法使いを目指すって約束しただろお!!」

「してねえよタコ」

「じゃ、じゃあ兄弟の杯は!？」

「それもしてねえよ。お前、いつにも増して気持ちわりいな」

「そこはご愛嬌つてことで」

「てめえに愛嬌なんざねえだろ、クソが」

「今日も『クソ』頂きましたー」

ホームルームまでまだ時間がある事を確認すると、携帯が鈴を転がしたような音を發した。メッセージの着信音だ。

画面を開くと、案の定奴からだった。

『やつほー！一花でーす！』

『クソが、何の用だよ』

『うん！用はないけど送ってみただけ！』

『そうかよ』

『うん！じゃあ、また放課後にね！』

その会話文が送られてから、本当に用がなかったらしくそれ以降送られてくることはなかった。

メアド交換なんてするんじゃないやなかった、と内思いながらチャイムが鳴り、教壇に担任が上がり耳を傾けた。

「えー、今日はカリキュラムの変更により、二学年全組対抗のバスケットボール大会をする事になりました」

担任の声にクラスの中で僅かにどよめきが起きる。カリキュラムの変更なんて、入学してから一度もなかった。

「この件は理事長からの提案でして、『いつも勉強に励んでいる生徒達に息抜きを設けてはどうか』という言葉から、私たち教師陣がカリキュラムを変更させてもらいました」

『へえ！理事長も粋なことをしやがる！』

『ウチは私立校じゃねえし、勉強第一って訳でもねえからな』

『二年生全組かー。バスケでいい所を見せれたら彼女できつかな』

『一度鏡を見てから発言して欲しいね』

「この好機を逃す訳にはいかない！今まで『アマゾン』と呼ばれていたこのクラスの汚名返上をかけて、全クラスを踏み台にするいい機会だ！みんな、ケツの穴締めていけよ！」

((（そつちが本音か）))

教師らしかぬ言動に一同は顔を引きつらせた。

『てめえら！五月ちゃんのためにぜってえ勝つぞおらあああ！』

『五月ちゃんのためなら俺は、天下に股間を晒そうが恥もなければ怯みもねえ！』

『パーティーの始まりだ』

『俺の拳が光って唸る時が来たようだなあ！』

『熱盛でいくぜええええ！』

五月コールが沸き起こる教室内は、まさに本能を覚醒させた野蛮人の雄叫びで満ちていた。

広大な体育館を使用して行われるバスケットボール大会。野蛮の集団、もといクラス『アマゾン』と言うチーム名の輝のクラスは最早圧勝だった。

「死ねえええええええ!!」

田嶋からのパスを受けた輝がダンクを決め、そこで試合終了の笛が鳴った。

5010

ワンサイドゲームもいい所である。

「ナイシユー、天宮!」

「けっ、雑魚が」

対戦相手が青ざめてるのを他所に、ギャラリーで観戦している他のクラスの女子から黄色い歓声上がる。

『天宮くん! かっこいい!』

『次も勝ってね!』

「うっせえんだよ! 黙ってろ!」

『キャー! こわあーい!』

「クソ女どもが……!」

「お前がクソだ、天宮」

「ああ!？」

田嶋の言葉に小野寺、武田、山田が頷く。

「てめえらも頷くんじゃねえ！」

「女心もわからん貴様に負ける俺じゃねえんだよ！ボンクラめ！」

「殺せるもんなら殺してみろよ！七三坊つちやんよお！」

「今は七三じゃねえだろ！」

「女子からキャツキャウフフされてるお前を、屋上から突き落とすことで頭がいっぱいだ」

「死なすツ!!」

試合が終わったにも関わらず、コート内で鬼ごっこが開始され、生徒指導の教師の拳骨が入り程なく終了した。

『アマゾン』の次の試合までかなり時間があるため、輝は水道で汗で濡れた髪を洗う。

「田嶋ア、タオル取ってくんね？」

「はい」

「ん、わりいな」

「気にしなくていいよ、ヒカル」

「……あ？」

振り向くとそこには田嶋ではなく三玖がいた。

「なんでお前がいんだよ」

「私のクラスは次だから」

「そうか」

「凄かったね、さっきの試合」

「別にそこまでじゃねえだろ」

タオルで濡れた髪を拭き、一息ついた。

「一花のこと、ありがとう」

「おう」

「ヒカルって案外優しいんだね」

「急になんだよ、気持ちわりいな」

壁に寄りかかる輝の隣に移動し、同じように壁に背を預けた。居心地の良さに目を瞑ると、

「あ、天宮！見つけたわよ！」

「次から次へとなんなんだよ、お前ら」

両手でタッパーを持った二乃が走ってきたのか、肩で息をしていた。

「レモンのハチミツ漬け作ったんだけど……食べる？」

「あ？いいのか？」

「べ、別にあんたのために作ったわけじゃないんだから！」

「じゃあ何のために作ったんだよ」

「う、うっさいわね！さっさと食べなさいよ！」

『はあ？』と首を傾げながら、一枚のレモンを摘み口に運んだ。

「ど、どう……？」

「美味しい、ふつーに」

「ほ、ほんと!?よかった……」

二乃がふと三玖を見ると、頬を膨らましてこちらを睨んでいた。ふふん、とドヤ顔をすれば更に頬を膨らませる。

すると今度は、

「あ！天宮くん！」

「あ！ヒカルくんだ！」

「わー！天宮さーん！」

「輝！こんな所にいたのか！」

ポンコツ三人衆とガリ勉野郎も参戦し、いよいよ三玖の機嫌がさらに悪くなり、二乃

の顔が引きつり出す。

「なあんであんたもいんのよ！上杉！」

「いや悪いのかよ！」

「ヒカルのたらし」

「ああ!?!俺なんもしてねえだろ！」

三玖が珍しくジト目で睨んでくるが、輝が睨み返すとぶいっとそっぽを向く。

「三玖ちゃん！そろそろ試合だよー！」

「あ、うん」

クラスメイトの女子が遠くから呼ぶ声に応じ、三玖は走って行った。

「なんなんだ、アイツ」

首を傾げながらまた一枚、レモンを口に運んだ。

結果、輝たちのクラスの圧倒的勝利によりバスケットボール大会は幕を閉じた。五月を胸上げしようとした者達があったが輝の制裁により、不発に終わったのは想像にかたくない。

「五月、ささっさと行くぞ」

「あ、はい！」

放課後の廊下を五月と輝は並んで歩く。欠伸をしながら目を擦る輝はなんだが子

供つぽく見えてしまい、思わず笑いそうになるがなんとか堪えた。言ったら殺される。間違いない。確かに疲れるのは無理もない。

『死ねええええええ！』

と言い、周りをビビらせながら動き回っていたのだから。

「今日もよろしくお願いしますね」

「おう」

「天宮さーん！遅いですよー！」

「いつまで待たせんのよー！」

「てめえらが早えんだよ」

今日もいつものメンバーで朝と同じ道を歩いて帰る。

五月はこの光景がいつまでも続いたらーと思ったがそんなことは絶対ない。輝と風太郎は雇われの身。卒業したらこの光景はもう二度と戻ってこない。輝自身は自分たちを生徒としてしか見てないが、少なくとも一花や二乃、三玖はそれ以上の何かを少なからず輝に抱いてる。熱情や愛情ーーーもしかしたら依存にも似た何かを。五月自身もないと言ったら嘘になる。無意識に彼に何かを抱いてるのは明白だった。だが、その正体がまだ分からない。

「五月、何してやがる！置いてくぞー！」

「は、はい！」

考え込んでしまったのか、前方の集団と相当距離が空いていた。まだ時間はある。じっくり考えるのもいいだろう。モヤモヤは晴れないが、時間が解決してくれることを祈る事にした。

「ほら！ヒカルくん携帯だして」

「なんでだよ」

「みんなとメアド交換しないと！」

半ば強制的に五姉妹と風太郎とメアド交換させられ辟易してしまう。

それからはいつも通り小休憩込みで三時間程度の勉強し、今日の業務も完了した。

流石にバスケットボール大会の疲れがあるのか、今すぐに帰りたいところ。

「よし、俺らは帰るけどちやんと復習しとけよ？」

「あれ？もう帰っちゃうんですかー？」

「ああ」

「え？今日は二人とも泊まってくんじやないの？」

「………は？」

「おいカマトト女、何をほざいてやがる」

すると、五月の携帯に着信が入った。

「もしもしー」

「おい、泊まるなんて一言も言っただけでねえぞ！次から次へと面倒ごとを増やしやがって！」
「そんなに怒らなくてもいいじゃんー」

「泊まつてつてくださいよー」

「……天宮くん」

「ふざけたこと抜かすのもーああ？」

「電話をあなたに取り次げとのことですよ」

「……？」

五月から携帯を受け取った。

「もしもし」

『天宮くん。娘たちが世話になってるね』

「あ？誰だあんた、このポンコツ共の親父か？」

『その通りだよ。初めましてだね』

「そうか。んで、何の用だよ」

『中々顔を出せなくて済まないね。本来ならばきちんと君と顔を合わせて話したいところだが、少し立て込んでいてね』

「気にすんなよ。あんたも大変そうだからな」

『そう言ってもらえるとこちらも嬉しいよ。どうだい？家庭教師の方は上手くやっているかい？』

「まあ、それなりに」

『それはよかった。二週間後に中間試験があると聞いたが、順調そうで何よりだ』

(クソが・・・・・・・・・・!!ガッツリ忘れてた・・・・・・・・・・!!)

『少々酷だが・・・・・・・・ここで君たちの成果を見せてもらいたい。二週間後の中間試験、五人のうち一人でも赤点を取ったら君と上杉くんには家庭教師を辞めてもらう』

「はあ!?!お、おい!待てよ!卒業まであと一年半もあんだぞ!?!いくら何でもー!」
『この程度の条件を達成出来なければ安心して娘たちを任せておけないよ。ここでハドルを設けさせてくれたまえ』

「・・・・・・・・・・」

『それでは健闘を祈る。いい結果を期待しているよ』

そこで通話が途切れた。

「一花」

「ん?」

「やっぱ泊まってくわ」

「ほんとー!?!」

(健闘を祈るだあ？上等じゃねえか・・・！！)
輝は静かに闘志を燃やした。

E p. 08 夜の勉強

「天宮さん、包丁上手ですね〜」

「包丁に上手いもクソもねえだろ！ぶっ飛ばすぞ！」

四葉が凄いい速さで野菜を切っていく輝をみながら驚嘆の声を上げた。

野菜を切り終わり、米をとぐ役目をかってでた五月を見ると、

「何してんだよ、バカ女！米を洗剤でとぐんじゃねえ！」

「え?! 違うんですか!?!」

食器等を洗う液体洗剤をご丁寧に入れようとしていた五月の手を掴み、なんとか未然に防いだ。

「てめえは食いもんを洗剤で洗えって教わったのか!?!」

「あれ………玉ねぎが小さくなった………」

今度は三玖が細長くなった玉ねぎであろうものをみながら首を傾げた。

「てめえは剥きすぎだ！忪しか残ってねえじゃねえか！」

「だって剥けって………」

「茶色い皮だけ剥けよ！全部剥くバカがどこにいんだよ！」

「な、何よ！このジャガイモ！全然切れないじゃない！イモのくせにい……！」

「危なっかしい切り方すんじゃねえよ！ボケが！」

「あれー？フータローくん、ピーラー知らない？」

「ぎゃー！指切ったー！」

どんちゃん騒ぎ状態のキッチンで七人があーだこーだ言いながら今晚のカレー作りに勤しむ。

「隠し味に抹茶ソーダ入れたい」

「蹴り飛ばすぞ」

とんでもないことを言い出す三玖を一蹴する。

「いやー、まさかヒカルくん料理できるなんて、隠れた才能だね。台所に立つ男の子はモテるぞ〜？」

「いいや、断じてそれは無い。男のする事じゃない」

一花の言葉を風太郎が真つ向から否定した。それを聞いていた二乃が嘲るような目で言った。

「はんつ。前時代的、バツカみたい」

「んだと!?!ポリシーは大事なもんなんだぞ！」

「ますますバツカみたい」

「このやろう……!!」

「ひ、一口味見してもいいですか!？」

「一口だけだぞ」

「あ、私もしたいです!」

カレーを小皿によそい、五月と四葉に渡した。見ろよ、五月なんか涎垂らしてやがる。

一口嚼ると、二人の顔が花が咲く程の笑顔を見せた。

「美味し……!!」

「ヒカル、ご飯炊けた」

「ああ、わかった。おらお前ら、喧嘩もそこまでにしとけ。飯出来たぞ」

「わーい! ヒカルくんのカレー!」

『キーン!』という効果音が聞こえてきそうな格好でカレーの皿を取りに来た一花のため息をつく。

「ヒカル、これ五月の」

「ん、わかっ……ンッ!？」

三玖から受け取った皿には白米が山になっていた。

「随分食いつぶりがいいんだな……あいつは……」

「いつものこと」

目をキラキラさせて待っている五月はさながら主人に構ってほしそうな犬である。

(犬だな)

「あ、天宮くん！いま失礼な事考えましたね？」

「考えてねえよ」

各々に配り終え、残るは輝と風太郎の物のみなのだが、ここで一つ問題が起こった。

五姉妹が楽しそうに話をしながら食事を始めているなか、風太郎の顔はこけしのように死んでいた。

「なあ、輝」

「ああ？なんだよ」

「さっき作ったのカレーだよな」

「ああ」

「白米なんだけど」

「ああ、白飯だな」

そう。輝と風太郎のだけカレーがなかった。

皿の上に乗っているのは白米。そう白米だけ。

「完全感覚白米なんだけどっ!？」

「しょうがねえだろ！五月が全部持ってたんだよ！カレーを！」

「ざまあないわね、上杉！今日もアンタの不幸でご飯が美味しいわ！」

「鬼畜生が！」

「食わねえならよこせ」

「持つてかれたんだけどっ!？」

結局二人はカレーのライスだけを食べ、満足そうな顔をしていた五月を風太郎がずつと睨んでいたのはここだけの話。

「完全感覚白米い………」

「うっせえな、いい加減機嫌直せよ。カレーくらいいつでも食えんだろ」

「確かに胚芽米は美味しかったけど」

「二人してなんの話してんのよ。お風呂、空いたからさっさと入つてきて」

「あ?」

二乃の言葉通りに輝と風太郎は何故か二人で風呂に入る事になった。見られて困るようなことは無い。嫌という訳でもない。ないのだが——

「温泉ならまだしも、なんで野郎と風呂なんざに入んなきゃならねえんだよ」

「同感だ」

「にしても」

「本当に」

「風呂広すぎんだろ」

現在二人は対面座り状態で浴槽に浸かっている。これも広すぎる浴槽のおかげである。五人が同時に入っても少しは余裕があるくらいだ。

「輝。さっきの電話の相手、誰からだっただ？」

「ああ？　——ポニコツ共の親父さんからだ」

「え!?!お父さんから!?!」

「てめえにお父さんって呼ぶ筋合いなんかねえだろ」

「————んで、なんて?」

輝は背中を預け、一息ついてから口を開いた。

「————二週間後の中間試験、一人でも赤点を取ったら俺らは解雇だつてよ」

「んな……!!?」

風太郎は思わず立ち上がった。

「お前はその条件を呑んだのか!?!」

「そりゃあ、雇われの身だからな。とりあえず座れよ」

「つ……」

渋い顔を浮かべながら風太郎はまた浴槽に浸かる。

?????
 ☒???
 ??*??*
 ??*??*

「天宮さんたち、お風呂長いね」

「きつと美少女たちの残り湯を堪能してるんだよ」

四葉の言葉に一花が楽しそうに言った。

「一花、あまり根も葉もないことを言うとな宮くんには怒られますよ？」
 「たはは」

五月が一花をジト目で見るとバツが悪そうに頭をかいた。

?????
 ☒???
 ??*??*
 ??*??*

「お前、本気で言ってるのか……?」

「つたりめえだろ。仮にポンコツ共が赤点取ったとしても何とかお前だけは家庭教師続
 けられるように俺が親父さんを説得する」

「お、お前はどうぞすんだよ!」

「別に俺は金に困ってねえよ。けど、お前は違え。――――借金、まだ残ってるんだろ
 ?」

「それはー、ー、ー」

「相場の五倍なんてバイト、いくら探してもぜってえ見つからねえからな」

「輝、お前……」

「やれる事は全部やるつもりだ。まあ、後はアイツらの努力次第だけだな。んじや、俺先上がるわ」

そう言つて浴槽から上がり、出て行く。その背中を見送り、残された風太郎は風呂の水面に映る自分を見つめながら奥歯を噛み締めた。

?????
 ☒???
 ??°
 ??*??*

「あ、帰ってきた！おかえりなさいーい！」

四葉が手をブンブン振りながら走ってきた。こつちもこつちで犬みたいだ。

「わー！お風呂上がりの天宮さんも新鮮ですね！」

「あ？そうか？」

「はい！なんか色つぽいです！」

「何言つてつかわかんねえけどぶっ飛ばすぞ」

「えーなんでー」

「おら、風呂入ったならさっさと寝やがれ」

「天宮さんはどこで寝るんですか？」

「あ？ソファでいい」

「ダメですよ！お客様なんですから！」

「いいつつつてんだろ！余計な気使うんじゃねえ！」

「ダメですー！せめて私のベッドを使ってくださいー！」

「ヒカルくんったら、そんなにフータローくんと一緒にいいの〜？」

上を見ると二階の手摺から身を乗り出し、ニヤニヤ笑う一花がいた。

「なんだったらお姉さんと一緒に寝よつか？」

「てめえと寝るとか死んでもゴメンだ」

「ならヒカル、私と寝よ」

今度は三玖が寝巻き姿で出てきた。

あー、胸元が危なっかしい。

「てめえらとなんかぜってえ寝ねえよ！」

「え？天宮さん、私のベッドで寝るんじゃないんですか？」

「お前はちよつと黙ってるな」

「はいっ」

「ふーん、四葉とは寝るのに私とは寝てくれないんだ」

「ヒカル・・・・・・・・・・・・・・・・」

（え、なに・・・・・・・・俺が悪いの・・・・・・・・？）

冷めた目でこちらを見下ろす二人に輝はもうどうでも良くなったのか深いため息を吐いた。

?????
☒??
??
??*??
*???

「結局こうなるんだな」

「はいっ！」

現在四葉の部屋で一緒にベッドに寝ている。

部屋に男女二人と、何とも間違いが起こりそうな場所であるがこと二人に関してはそんなことはなかった。

「大体、お前はおかしいと思わねえのかよ。男と一緒に寝ることに」

「そうですかね。私は天宮さんを信じているので！あと、詳しい事はわかりません！」

「・・・・・・・・そうかよ」

「はいっ。カレー、美味しかったです。また食べたいです」

「また作つてやるよ、今度はもうちよい多めにな」

「はい！私、天宮さんのカレー大好きになりました！」

「そうか……」

向かい合うように寝転んでいるため、四葉の顔がよく見える。トレードマークのウサギ調のリボンをしていないため、いつもと印象が違う。しかし、本当にそっくりで驚く。おそらく髪型さえ変えれば誰だか見分けもつかないだろう。

「天宮さん、私勉強頑張るのでいっぱい教えてください」

「……おう、ぜってえ卒業させてやるからな」

「っ！はいっ！」

その笑顔はいつもと違う気がした。

僅かに赤に染まる頬に、照れたようにはにかむ顔。それを照らす月明かり。神秘的……とは言い過ぎだが、普段より綺麗だったのは間違いない。

(コイツのためにカレー作つてやんのも、悪かねえかもな……)

そう思いながら、静かに意識を手放した……

しかし、持ち帰ってまでするのは何だか嫌なので結局置いてきてしまった。取りに戻る時間はない。

「まさか、あのガリ勉強郎とアイツが結婚とはな……」

色々な事があつた一生に一度の高校生活。

瞼を閉じれば真つ先に思い出せる、色褪せることのない思い出。

癪だが結構楽しかった、と思わず口角が上がる。

ハッ、とすぐに軽く頭を振り、椅子から腰を上げた。

「ポンコツ共のアホ面を拜んでやるのも、悪かねえかもな」

そう言つて荷物を持ちその場を後にした。

天宮 輝

結びの日から2000日後――



「クソ、体が痛てえ……」

時間は朝の6時。少し早いですが、朝食の準備をする時間を考慮すれば丁度いい時間だ。

しかし、四葉の寝相の悪さには驚いた。不意に繰り出される拳と蹴りの嵐に総身が打ちのめされ、思わずベッドから逃げて来たのがついさつき。

「飯の準備でもすつか……」

じゃじゃ馬娘五人の世話をここまで焼くようになるとはとんだ物好きになったものだ、内心悪態つきながら、キッチンの中からフライパンや鍋等の調理器具を出している。

1時間後——

「いい加減起きろつつつてんだろうが！飯が冷めんだろ！」

「うーん、あと十分……」

「てめえのその決まり文句は聞き飽きたんだよ！」

「うわあああ！いきなり毛布剥がないでよ！裸なんだよ!？」

「うっせえよ！見られても減るもんじゃねえだろうが！パンツも履いてんだろ！」

「減るよ！後。パンツじゃないよ！シヨーツだよ！」

「変わんねえよ！」

二階の二花の部屋から輝の怒号が響くのを下で朝食を食べる四人と風太郎の耳に嫌でも入ってくる。

「天宮くんも大変ですね」

「天宮さんの朝ごはん美味し〜」

「朝からよく食べるわね、アンタたち」

すると、静まり返った二花の部屋のドアが思いつきり開き、中から二花を担ぎ上げて仏頂面の輝がでてきた。

「おーろーしーてー！」

「やかましい、ぶち殺すぞ」

「鋭い目付きで睨むと、怯えた子犬のように萎縮し何も言わなくなってしまうた。」

「な、なんだ？あの光景……」

「いつものこと」
そのまま階段を降り、担いでいた二花を席に座らせる。その顔は完璧に不貞腐れてい

「おら、さつさと食え」

「………むう」

「むうじゃねえよ」

「………むう！」

『なんなんだよコイツ……』とため息をつき、頬を膨らませてこちらを睨む一花を見る。あー、こういう時はあれだ。

「………飯食って、あの汚部屋を掃除したらお前の大好きなフラペチーノを買ってやる」

「………むう!?!」

「おおっと、そんなんで驚くんじゃねえぞ。ただのフラペチーノじゃねえ、先週にオープンしたばかりのあのスターなんちゃらって店の一番高えフラペチーノだ」

「むう！むう！」

「どうだ、飲みてえか？」

物凄い速さで首を縦に振る一花に輝はニヤリと笑った。

「ならさつさと飯食って、あの汚部屋を掃除しろ」

「任せてください！」

(けっ、チョロイヤツだ)

「汚いやつだな、お前」

「アイツ拗ねると面倒なんだよ」

『ふうん』とボヤク風太郎が視界の隅に一花以外の四人がそそくさと二階に上がるのを見つけた。

「お前らどこに行くんだよ、勉強すんだぞ？」

「え？ちよ、ちよつと部屋の掃除をしようかと……」

五月がぎこちなく言うと、他の三人もコクコク頷く。

「お前らの部屋綺麗だからする必要ねえだろ……あ？待てよ、お前らまさか」「わわわ私たちは別に、お部屋の掃除をして天宮さんに奢ってもらおうとかなんて全然考えてませんよ!」

「バカ、四葉!シーツ!」

嘘が下手な五月の時点で気づくべきだったのだが、どうやらここにもバカモンがいたようだ。ウサギ調のリボンがピコピコ跳ねる。

「てめえら……!」

「だ、大体一花だけとかずるいじゃない!」

「ヒカルのケチんぼ」

「天宮さんの朴念仁!」

「捻くれ者！」

「後半関係ねえだろ！」

貴重な休日の朝をこんな形で潰れるとは思わなかった。五人揃つての部屋の大掃除が行われ、一花以外の部屋はぶつちやけ30分もかかつてない。問題はあの裸で寝るズボラ色情魔の一花であつた。

「この部屋、腐海だな」

「なんかあの目玉がいつぱいあるでかい芋虫とか出てきそう」

「相変わらず汚いわね」

「キープアウト」

「これは大変そうですね」

「あまり、入りたくないです」

上から輝、風太郎、二乃、三玖、四葉、五月の順で各々酷評を口にする。

「地味に傷つくんですけど」

「自業自得だろ、アホ」

「ホントにお前、長女なのか？」

「パス、私入りたくない」

「キープ、アウト」

「私はお手伝いします！」

「わ、私も頑張ります」

やはり、どの家庭も末っ子とはいいい子ばかりだ。

かくして腐海の大掃除は二時間かけて終わりを迎えた。

「すげえ、酸素が満ちてやがる」

「空気が、美味い……」

「私の部屋の扱いってそんなに酷かった？」

晴れ晴れした顔で肩を組む男二人を遠い目で一花は見ていた。

結びの日から2000日後――

輝が帰国する数時間前――

天宮家

「よし！準備出来た！お姉は？」

「あ、あれえ？コンタクトが、上手く、入ら．．．．．ギャー！目がアアア！ホウhy!? Japanese contact lens!」

「二人で何してんの．．．．．」

ため息をつき、優は化粧をしている遙に尋ねた。

「お母さん、お兄は？」

「もうすぐ日本につくつて。そのまま式場に直行するみたい」

場所は変わって透の自室では、スピーカーにした電話を傍において鏡の前でネクタイを締めていた。

「驚いたよ、君の方から招待状を送ってくるなんてね」

『娘の一生に一度の晴れ姿を君の家族にも見て欲しかったからね。迷惑だったかな？』

「とんでもない、寧ろ嬉しいよ」

『天宮くんは来れるのかい？』

「うん、もうすぐ日本に着くらしいよ。多分、一番驚いてたんじやないかな。風太郎くんとあの子が結婚なんて」

『驚く顔が真っ先に目に浮かぶよ』

「はは、そうだね」

『大学の方はどうなんだい?』

「順調らしいよ。単位を落とさないようにほぼ毎日勉強漬けだつて文句を言っていた。輝がまさか海外に行きたいなんて言った時はビックリしたよ」

『天宮くんらしいじゃないか。本当には彼には毎度驚かされた』

「僕の息子だからね」

『そういう所は昔の君にそっくりだよ、透』

「はは。――今日は本当におめでとう、マルオ」

『――――ありがとう』

すると、下の階から遥の呼ぶ声が響く。

「それじゃ、また式場で」

『ああ』

通話を切り、透は自室を後にした。

?????
 ☒???
 ???
 ??*??*
 *
 *
 *
 *

「ふざけんなよ……! 迎えに行けねえから式場に直接来いだと!」

遥とのトーク画面を見ながら、眉間に皺をこれでもかかと寄せる。

「どーすんだよ、正装なんか持ってねえぞ……」

完璧な私服の自分に、式場まで来いと言い張る鬼母に頭を悩ませた。

「……………」

徐に卒業式で撮った、七人の集合写真を取り出し、そつと、指でなぞり微笑んでみせた。

「元気にしてつかないかな、アイツら」

誰にも聞こえない声で呟き、そつとしまい込んだ。

E p. 10 中間試験

「恋と愛」の違いはなんだろうか。

恋愛——それはもう、書籍に関わらず多くのメディアに置いて重要視される、人類の究極の関心事、人類の永遠のテーマと言っても過言ではない。

多くの哲学者たちも恋愛について多くを語っているが、人類の歴史を掛けても解明できなない謎。

(「恋と愛」の違いってなんだろう……)

授業を聞きながら頬杖をつき、一花は外を見た。

そんな事を考えていると、ふと、ある人がこんなことを言っていたのを頭をよぎる。

「愛」は真ん中に「心」があるから「真心」

「恋」は下に「心」があるから「下心」

(でも愛人、恋人となると逆になるわけで……)

『うーん』と頭を傾げ、眉に皺を寄せる。

ハッキリ言って、今の自分の頭では結論づけることは不可能だった。

「難しいなあ……」

はあ、とため息をつき顔を前に向けまた授業を聞き始めた。

すると、隣のクラス——輝たちのクラスからまた担任の悲壮な声が上がっていた。

『田嶋くん！教科書を立てて携帯をいじるんじゃないよお！山田くん！机の上で暴れるんじゃない！小野寺くん！君はPS4をいい加減家に置いてきなさい！武田くん！教室で漫画を読むんじゃない！及川くん！変身ベルトを腰に巻くんじゃないよ！誰だ誰だ、教卓に花瓶を置いた奴は！』

（またやってる）

一花は心の中で笑った。

そんな日常が続き放課後と土日を使い、試験に向けたただひたすら勉強漬けの毎日を送ること二週間。

試験前最後の日曜日も泊まり込みで教えた次の日の朝——

七人の影が通学路を駆け抜ける。

「なんで時計がぶつ壊れてんに気づかねんだよ！」

「俺に聞くな！早く、走れ……！」

「てめえと三玖が一番遅れてんだよ！」

「ふ、不甲斐なし……！」

「ま、待つて……!」

輝と四葉が最前線で走り、その後ろを一花、二乃、五月が追従する。最後尾は運動が出来ない三玖と風太郎。

「眠い〜」

「やば、やつばスッピン見せたくないわ」

「他の奴らが見せてんだろ!」

「お、お腹が空いて力が……!」

「燃費のわりい野郎だな!これでも食つとけ!」

バッグからおにぎり三つを五月めがけ投げる。それをタイミングよくキャッチし、目を輝かせた。

携帯で時間を確認すると、登校時間の8時半まで後、10分しか無かった。

「おい、四葉!お前は先に……!あああああ?!いねええええ!」

先程まで隣にいた四葉が忽然と姿を消していた。

その後は老人の荷物を運んだり、外国人の幼い少年を病院に送り届けたりと『違う、じゃない』感が満載の良い行いをした五姉妹と輝、風太郎は昇降口に仁王立ちで立っている生徒指導の教師を校門に隠れながら見ていた。

「クソが……!なんで今日に限ってアイツがいんだよ……!」

「奮走虚しく、タイムオーバーだ。試験もじき始まる」

風太郎が携帯を見ながら苦々しい顔で言った。

「ど、どうしましょう……」

「あんた、ご飯粒付いてるわよ」

「でも、学校はすぐそこだよ」

「生徒指導の先生は許してくれるかなあ」

すると、風太郎は携帯の連絡先を開きある人物に電話をかけた。

「もしもし、四葉か？もう学校に着いているのか？……いやいい、そのまま学校に
いてくれ」

そう言つて携帯をしまい、不敵な笑みを浮かべた。

「四葉が学校にいることは確認した。一度登校した生徒なら生徒指導も厳しく言えない
だろう。お前たち全員……四葉のドツペルゲンガーになれ！」

?????
☒???
??*???

「よし……後はお前だけだ。輝」

「ぎげんなよ……んなモン死んでも付けっかよ……！くだらねえ事

やってねえでさっさと行くぞ！」

そうやって昇降口へ歩みを進めようとする輝を風太郎が止める。

「待て待て！お願いだ、ヒーくん！」

「ああ!?誰がヒーくんだ！」

「このリボンを付けるだけでいいんだからさ」

そう言つて、四葉が付けているウサギ調のリボンを差し出す。

「お願い」

「ムリ」

「お願い」

「ムリ」

「お願い」

「やだ」

「なんで？」

「やだやだやだ」

「は？」

「やらない」

「やれ」

「やだやだやだやだやだやだ！」

「一花！」

「がってん！」

「やだああああああああ!!」

一分後——————

「へえ、結構似合ってるじゃん」

風太郎の感想は確かに的を射ていた。容姿が整っているためか、決して似合っていない訳ではない。むしろ似合っていた。しかし、それとは裏腹にチエック柄のリボンを頭に強制的に付けられた輝の顔は怒りと羞恥がごちゃ混ぜになり、体は小刻みに震えている。

「後で覚えてろよ………ぶち殺してやる………!!」

「大丈夫、似合ってるよ。ヒーくん」

「あんたもヒーくんを煽るんじゃないわよ」

「てめえらその名前で呼ぶな!!」

「よし、ドツペルゲンガー作戦開始だ！」

「まず私が行く」

三玖が一番手を買って出る。

「おはようございまーす!」

いつもの三玖の口調とは違い、四葉同様テンション高めハツラツとしていた。

「お前!遅刻だぞ!」

「おーつと、このリボンに見覚えありませんか?」

四葉に化けた三玖が頭のリボンを指さす。生徒指導の先生もそれを見つめ、

「ふーむ……その顔、そのリボン……確かに数分前に見たような……」

「先生の手伝いでまた外に出たんです」

「そうか。始業のチャイムはもう鳴っている。試験までに着席するんだぞ!」

「はーい」

やはりと言うべきか、わかっていたと言うべきか。最早見分けはつかないらしい。

三玖はそのまま昇降口に入り、一息ついた。

「ふう……知りたきこと陰の如く」

「よし、三玖が入った!次々行け!」

風太郎が合図を出し、一花、二乃、五月が続く。

「おつはようございまーす!」

「ぬ……お、おはよう」

三分後——

「おはようございまーす」

「ぬぬ．．．．．!?」

そしてまた三分後——

「お、おはようございます!」

「ぬぬぬ．．．．．!?」

(この生徒、何周も何してるんだ．．．．．?)

四葉に化けた一花、二乃、五月も無事、生徒指導の目を欺き校舎の中に入ることが出来た。

「せ、先生を騙すなんて．．．．．私はなんて無礼を．．．．．」

「あんた真面目すぎ」

「あー良かった!みんな入れたんだね!」

「「あ、本物だ」」

全員が校舎に入ったのを遠くで確認した風太郎が次に送り出すのは——

「あれっ?天宮さんと上杉さんは?」

「え?あー、お二人は．．．．．」

五月が目線を送る方へ全員が顔を向けるとそこには、物凄い怒気を持ちながら歩いてくる輝が映った。

「ぬ・・・・・・・・お前、ちこーりーひっ!?」

(リボン付いてるのに顔こええ・・・・・・・・!)

「おはよーございまーす」

「お、おう。は、早めに教室に行けよ」

たつた一睨みで教師を竦ませる生徒がいてもいいのだろうか。なんのお咎めもなく校舎に入るなり、リボンを乱暴に取った。

「このリボン、なんの必要もねえじゃねえか!」

「まあまあ、いい経験も出来たんじゃない?」

「要らねえ恥かかせやがって・・・・・・・・!」

リボン付きの輝を写メで撮った事は、墓まで持つて行こうと一花は心に決めた。

え?なんでか?そりゃあ、バレたら間違いなく殺されるからねつ。ま、みんなには見せちゃうんだけどね当然だよね!

「フータローは?」

「あ?ガリ勉ならそこにいんだろ」

輝が指さした方には同じくリボンを付けた風太郎がそこにいた。

「おはようございまーす」

「・・・・・・・・」

そのまま生徒指導の教師の横を通り過ぎようとしたが、

「遅刻した上にふざけてんのか？」

「ですよ。俺もそう思います」

無理だったようだ。

「生徒指導室に來い！」

首根っこを引つ張られながら連れ去られていく風太郎は輝に向けて叫んだ。

「輝！早くソイツらを連れて行け！」

「わーつてるよ」

「頑張れよー！お前らー！」

「お前は一人で何を言ってるんだ！」

?????
⊗???
???:?
??*???
??*?

「残り10分」

（こんなもんか……）

シャーペンを置き、軽く欠伸をする。

『一人でも赤点を取ったら家庭教師を辞めてもらおう』

(やれる事は全部やった。後はアイツら次第か．．．．)
 社会

三玖は問題を見ながらシャーペンを走らせていく。

『歴史に関して俺から教えてやれることはもうねえ。テストん時は自信持っていけよ』
 (難しい問題ばつか．．．．でも歴史なら分かる。ヒカルよりいい点取ったらどんな顔するかな)

国語

四葉は腕組をしながら唸っていた。

「うゝゝゝん」

『五択問題は大体四番目の確率が高え。どうしてもわかんなくなったら四番目を書け』

(よし．．．．．!)

英語

(討論、討論．．．．わかんないや、次)

二乃は空白が目立つ答案用紙に更に空白を作ろうとしたが、

『討論は英語で『d e b a t e』だ。ローマ字読みで『でばて』と覚えればいい。難しく考えすぎんなよ』

(わかってるわよ．．．．．)

数学

(終わつた。こんなもんかな、おやすみー)

一花は机に突つ伏すように倒れるが、

『いいか、数学は特に見直しが必要だ。式はあつてなのに計算が間違つてることはよくある。最低でも一回は見直しをしろ』

(・・・・・・・・まあ、それくらいならしてもいいかな)

理科

(お二人を辞めさせはしません)

五月は二週間前の夜を思い出した。

『一人でも赤点なら辞めてもらおうと先程伝えたんだ』

『本当、ですか・・・・・・・・？お父さん・・・・・・・・』

父の無慈悲の言葉を聞いてから、人一倍努力してきた自負はある。

足りない頭に、色んなことを叩き込んだ。

(絶対に、赤点だけは・・・・・・・・！)

風太郎は右斜め前に座る輝を見た。

『お前だけは家庭教師を続けられるように俺が親父さんを説得する』

(俺は、どうすれば・・・・・・・・)

こうして、中間試験は順調に進み無事終わりを迎えた。

テストの返却は明日、今日は部活動もなしのため、全校生徒がこぞつて下校を開始する。

輝もその中に混ざり、自宅へ帰る。今日はカテキョーがオフの日。

家の玄関を開けると、流石に輝以外はいなかった。

リビングに入ると、机に乱雑にアルバムが二冊置いてあった。

「つたく、片付けぐらいしろつての」

昨日の夜に閲覧したのであろうアルバムを持った瞬間、一枚の写真が宙を緩やかに舞いながら床に落ちた。

「あ?」

拾い上げ、裏返すとそこには小学生の頃の自分が、年相応の無邪気な笑顔で映っていた。

「修学旅行のやつか。確か、京都に行ったんだっけか」

懐かしさに思わず笑みが零れる。

その写真を眺めていると、角の隅に見覚えのない一人の少女が此方を見ていた。

「あ?誰だコイツ……」

桜色の長い髪に、蒼い大きな瞳。白いワンピースが良く似合う少女だった。

「こんなヤツ、小学の時いたか．．．．．？」

自分の記憶を遡ってみても確かにこの少女はいなかった。
仮にいたとしたら、恐らく忘れることはしないだろう。

「まあいいか」

考えれば考えるほど頭が痛くなる気がした。その時は気にもとめず、そのままアルバムに挟み戸棚にしまう。

「ひと眠りすつか．．．．．」

明日の結果次第で自分と風太郎のこれからが決まる。

だが今はそんな事を考えたくなかった。制服を着たまま逃げるようにベッドに寝そべり、目を閉じた。

体は正直なもので、相当疲れていたようである。目を閉じるなり直ぐに意識は手を離れていく。

(今日はもう、疲れた．．．．．)

そのまま深い眠りの底へと落ちていった。

E p. 11 再スタート

「先日の中間試験の返却するよ。最初は天宮くんだね」

「うい」

気だるそうに席を立ち、担任の前に行くとき全教科の採点が終わった答案用紙を渡された。

「おめでどう。今回の中間試験は君が一位だったよ」

「そうか……」

「すげえ！天宮があの上杉を越したぞ！」

他人のことを自分の事のように騒ぐクラスメイト達を他所に、至つて平然を装い席に戻った。

(天宮くん……)

五月はその姿を見ながら、少し眉を下げた。

????
 ☒???
 ??.
 ?? *??
 ?? *
 ?? *

「よし、全員集まったな？」

時刻は放課後。場所はいつもの図書室で、五姉妹の前に風太郎と輝が立つ。

「どうしたの？改まつちやつて」

「水臭いですよ」

「中間試験の報告。間違えたところ、また教えてね」

「ああ。ともかくまずは………答案用紙を見せてくれ」

「はい。私は………」

「見せたくありません」

先程まで黙っていた五月が声を上げた。

それを黙っていた輝は口を開き、五月を見た。

「……五月」

「嫌です！テストの点数なんて他人に見せるものではありません！」

「……五月」

「個人情報です！断固拒否しますッ！」

「五月、いい加減にしろ」

その言葉に、一瞬言い淀むが今回は食いだがる。

「つ……でも………！」

「いいから、さっさと見せろ」

それでも平然な顔で言ってくる輝に、五月は下唇を噛んだ。その顔を見れば大体予想はつく。『ダメ』、だったのだろう。

案の定、二週間の勉強漬けは意味があつたのかなかつたのか……まあ、最初に比べればかなりマシになったのは確かだ。しかし、到底こんな点数では卒業というゴールテープを切ることは到底出来ない。五人の答案用紙に目を通す輝と風太郎の顔が徐々に厳しく変わる。思っていたより少し……いや、かなり出来が悪い。

「他の四科目はダメでしたが、国語は天宮さんの教えてくれた通りの山勘が当たって30点でした！こんな点数初めてです！」

「社会は68点。その他はギリギリ赤点。悔しい」

「私は数学だけ。今の私じゃこんなもんな」

「国数理社が赤点よ。言っとくけど手は抜いてないから」

「合格ラインを超えたのは一科目……理科のみでした……」

「こんな出来がわりいのか……」

「予想外だ。二週間も基礎を固めたつて言うのに……」

改めて五人の頭のポンコツ具合を再確認させられた輝と風太郎は深い溜息を吐いた。

「まあ、合格した教科が全員違うなんて、私たちらしいけどね」

「あ、そうかも」

「それに最初の五人で1000点に比べたら……」

「ああ、てめえらも成長したってこった」

輝は一つ間を置き、最初に三玖を見る。

「三玖」

「なに？」

「今回の難易度で68は大したもんだ。偏りはあるけどな。これからはこのアホ共に教えられる箇所は教えてやれ」

「え？」

「そんで、四葉」

次に四葉に目を向ける。

「はいっ」

「イージーミスが多いつつつてんだろ。今回は山勘が当たったからこんな点数だけど、次はそうはいかねえ。焦らねえで慎重にやれ」

「了解です！」

「カマトト女」

今度はカマトト女こと一花に視線を投げた。

「カマトトつて……」

「見直しをしたのは百歩譲って褒めてやる。けど、一つの問題にお前は拘らなさすぎだ。半分までいいところいつてんの……最後まで諦めんじゃねえぞ」

「はい」

「次は万年反抗期野郎」

更に二乃を見る。

「誰が万年反抗期野郎よ」

「お前だよ。てめえには一番手を焼かされたからな。目を離せばすぐにガリ勉と喧嘩しやがって。俺は他のバイトで今までのように来れなくなる。ガリ勉と喧嘩すんじゃねえぞ」

「ふん」

「ヒカル？」

「あ？」

声の抑揚からして三玖であろう。そちらを見ると、目尻を下げた彼女がこちらを見ていた。

「他のバイトってどういう事？来られないって……なんでそんな事言うの？」
「そのまんまの意味だろうが。他のバイトがあっから行けねえんだよ」

「じゃあどうして何も言ってくれなかったの……?」

「言う必要がねえからだ。こんな事を言つて、てめえらが勉強に集中出来ないなんてふざけたこと抜かしたらこつちがお手上げだからな」

「でも、どうして……ッ!」

いつもは大人しい三玖が今回ばかりは食い下がってくる。

「話してくれたりしてくれても……ッ!」

「三玖」

「五月……?」

「今は聞きましよう」

三玖は何か言いたげな表情で渋々座る。

「五月」

「はい」

「お前は本当にバカだな」

「はい……はいッ!」

「一問に時間かけすぎなんだよ。最後まで解けてねえじゃねえか。わかんねえところは飛ばして、余った時間を使ってわかんねえところを解けて言つただろ。てめえの脳みそはニワトリか?」

「ニ、ニワ、ニワ、トリ……」

「とりあえず、問題は最後まで解け。次から気いつけるよ」

「でも、あなた達は……」

言いかけたところで五月の携帯に着信が入る。画面に表示されていたのは『お父さん』という文字。

「父、からです」

「ああ」

五月から受け取り、通話ボタンをタップした。他の姉妹達は首を傾げ、事の成り行きを見ている。風太郎は下を向いたままだった。

「もしもし」

『ああ。五月くんと一緒にいたんだね。個々に聞いていこうと思つたが、この際だ。直接、君の口から結果を聞こうか。嘘は、分かるからね』

「つかねえよ。ただ、こつちからもお願いがある」

五月の心臓の鼓動が速まる。ダメだ、それ以上言つたらもう彼と同じ空間で勉強が出来なくなる。もう話も出来なくなる。もう、名前を呼んでくれなく……

(ダメ……)

『……聞こうか』

(ダメ………)

「ガリ勉………上杉だけは切らねえでやってほしい」

(ダメ………!)

『ふむ。ということとは?』

「試験の結果は————」

(ダメ………ッ!)

五月が席を立ち上がり、輝の持っている携帯を奪おうと手を伸ばした瞬間————
五月よりも先に他の手が輝から携帯を奪った。

「………あ?」

「パパ?二乃 فقط」

『おや?二乃くん、何か用かな』

「一つ聞いていい?なんであんな条件出したの?私たちの誰かが赤点取ったら、天宮と上杉には家庭教師を辞めてもらうって」

「え?」

「そんなの知らない………」

「天宮さんと上杉さんが………?五月は知ってたの?」

「………はい」

一花、三玖、四葉が輝と風太郎を見る。

バツが悪そうに頭をかく輝と、あからさまに明後日の方向を見る風太郎。

この反応をするって事は間違いないのだろう。

「おい、ガリ勉……………！どういふ事だよこれ……………！なんで二乃が知ってんだ……………！」

「す、すまん……………言つちまつた……………」

「おま……………！もつとめんどくさくなんだろうが……………」

『僕にも娘を預ける親としての責任がある。高校生の彼らがそれに見合うか計らせてもらっただけだよ。彼らが君たちに相応しいのか、ね』

「私たちのためってことね。ありがとう、パパ……………でも、相応しいかなんて数字だけじゃわからないわ」

『それが一番で至極簡単な判断基準なんだよ』

「……………」

二乃は軽く息を吐き、言つた。

もう二度と付けない、決定的な嘘を。

「あつそ。じゃあ教えてあげる—————私たち五人で五科目全ての赤点を回避したわ」

「てめ、何を……!?」

「おい……!?」

『……本当かい?』

「嘘じゃないわ」

『そうかい、二乃くんが言うのなら間違いはないんだろうね。これからも彼らと勉学に励むといい』

その言葉を最後に通話越しの父の声は消えた。

「お前、何を考えて……」

「私は英語、一花は数学、四葉は国語、三玖は社会、五月は理科。五人で五科目クリア、嘘はついてないわ」

「っ……」

「結果的にパパを騙す事になった。多分二度と通用しない」

そう言つて、輝の元に歩み寄りその胸を軽く叩いた。

「次は、実現させなさい」

「……」

「ねえ! どういう事!?! 家庭教師辞めるって!」

「辞めるんですか!?! 天宮さん!?!」

一花と四葉が輝に詰め寄るのを遠くで見ている三玖はそつと胸を撫で下ろした。

「三玖、安心してください。どうやら彼らとはもう少し長い付き合いになりそうです」

「……………うん」

風太郎も安堵した表情でその光景を見ていた。

「ありがとな、二乃」

「ふん、勘違いすんじゃないわよ。あんたのためじゃないんだから」

「それでもだ」

「……………あんたと天宮じゃなきや、勉強する気にもならないわ」

「そうか……………それは嬉しいことだ」

こうして中間試験は何とか終わり、また平凡な日常が始まろうとしていたが、一難去ってまた一難。林間学校があるんだよなあああ。

「四葉、口開いてんぞ」

「だって天宮さん、これって……………」

輝と四葉はイスに座り、テーブルに置かれた黒い物体を見た。

「石ですよ」

「コロツケ」

四葉とこの黒い物体を作った本人の声が重なる。

「石じゃなくて？」

「コロツケ。味は自信ある。食べてみて」

「これはコロツケなのか……?」

首を傾げ、その『コロツケ』なる黒い物体の一つを持ち上げる。

(固っ……)

これコロツケなんだよね? おかしい。惣菜らしかぬ固さだ。

輝と四葉は生唾を飲み込み、一抹の不安を抱え一氣に口に入れた。

「ど、どう……?」

「ああ……」

「うん……」

二人の返答を緊張の面影で待つ偽コロツケシェフ。その返答は――

「クソまずい!」

「あんまり美味しくない!」

クリティカルヒット。痛烈な2コンボでシェフの心は打ち砕かれた。

「わかつた――」

「え？」

「このまま言われっぱなしは悔しい。完璧に美味しくなるまで作るから。二人には食べなくてもらう」

中野シェフ（三玖）の本気、眠れる獅子を呼び覚ましてしまったようだ。

一時間後————

「もう無理……………」

「水……………」

「何してんのよ、あんたたち……………」

テーブルに突っ伏している輝と四葉に、二乃は眉をひそめる。そして、二人を撃沈させたソレを見た。

「何コレ……………」

「コロッケ」

「石じゃなくて？」

「それはさつきも聞いた」

『おかしい。材料は完璧のハズ……………」と呟きながら大量の石を錬金する三女を

止め、一先ずこの撃沈状態の二人を寝かせた。

「とりあえず、なんか買ってくるからあんた達は大人しく寝てなさい。行くわよ、三玖」
「まだコロツケが……」

「あんたに本物のコロツケってやつを見せあげるから」

そう言つて三玖を引つ張りながら、出て行つた。

やはり、騒がしくない。ここは違和感を感じる。

「クソ、カテキョーの日だつてのに……」

「まさか、ここまで食べさせられるとは思いませんでした……」

ムクリと起き上がり、輝の方を向いた。

「でも、楽しいです！ 天宮さんが来てから、みんないつもより楽しそうですよ！」

「気のせいだろ……三玖なんか、いつも通りにしか見えねえぞ」

「ああ見えて、一番嬉しそうなのは三玖なんじゃないんですか？」

「どうだか……」

そう言つて頭を横にし、窓の景色を見る。

「私も、嬉しいですよ？」

「あ？ 何がだ？」

「天宮さんに勉強教えてもらえるのが」

「お前は素直なのかバカなのかわかんねえな」

「多分、どっちもです」

そう言つて立ち上がり輝のそばにいき、頭を膝の上に乗せた。まさに膝枕状態だ。

「おま、何をーrierー」

「私は嬉しいです、天宮さんに会えて。何故かわかりますか？」

「んなモン．．．．．」

「好きだから」

「．．．．．は？」

いつにもなく真面目な顔で言ってくる四葉の顔に目を見開く。

頬が赤いのは陽の光のせいだろうか。それともあのコロツケのせいでおかしくなっているのだろうか。

「お前、何を言つて．．．．．」

「へへ．．．．．嘘です」

イタズラな笑みを浮かべた。

「やーい！引つ掛かりましねー！」

キヤツキヤ騒ぐ四葉を見ながら、前髪を掻き上げた。

「ふざけやがつて．．．．．」

「……………今はまだ嘘つてことにしておきます」

「あ？なんか言ったか？」

「いえ！なんでもありません！」

「はあ……………」

先が思いやられるとはこの事を言うのだろうと思いながら、外の景色を再度見た。

晴天そのもの。

(何も起こらきゃいいな、面倒事)

残念、林間学校があるんだよなああああ。

E p. 12 一難去つてまた一難

夏から秋へと変わりつつある十月。

都心部に近いためか、昼間の暑さはまだ夏の名残がある。しかし、早朝と夜は秋特有の温かさと寒さの中間の温度。中々過ごしやすくなってきた今日この頃。

徐々に木々が色付き始め、上を天蓋のように覆う葉の隙間から差し込む木漏れ日に風太郎は、手に持っていたテキストを閉じ、目を細めた。

「秋か……………」

「登校中も勉強かよ」

後ろからの声に応えるようにまた再度、テキストを広げた。

「登校しているこの時間も、俺にとつては貴重な時間だ」

「勤勉なこつて」

声の主が風太郎の隣へと移動し、同じ歩幅に合わせる。

「後悔してるか？」

「……………何が」

風太郎の突然の問いに、ストローから口を離した。

「家庭教師を続けることに、だ」

テキストから目を離さず、ページをめくる音が妙に耳に響く。輝はそれを横目で見ながら、視線をまた前に戻した。

「別に、してねえよ」

「そうか」

「おう」

「もう少しで林間学校もある。その前に少しだけでも詰めていくぞ。今度は期末試験の為に」

「わーつてるよ」

????
 ☒??
 ??°
 ??*??*
 **

「……………という訳なんだよ。頼まれてくれないかな」

「却下」

「そう言わないでくれよ。今日中までに決めないといけないんだ」

ホームルームが終わった後、担任の教師に呼びだされ現在職員室で懇願するように頭を垂れる大人と、不機嫌さMAXの少年がそれを見下ろす異様な光景に、周囲の教師陣

の目線を集める。

近々行われる二学年の林間学校。どうやら、その実行委員をやつて欲しいという話であつた。当然、やりたい奴など居るはずがない。高校生活の修学旅行、文化祭に次ぐビッグイベントの一つをなぜ役員という形で参加しなければならないのか。更に今年林間学校は趣向を凝らしたらしく、目玉のキャンプファイヤーに加え、前年行われなかつた肝試しに各クラスの出し物等、思いつく楽しそうな事を全乗せした結果、当初予定していた実行委員会の人数では足りないというのだ。

後先を考えずに行動に移す教師あるある（作者談）。正味な話、頼まれる身からしてみればいい迷惑である。

「考えた奴アホだろ」

「その考えた人が学年主任なんだけどね……」

「んで、なんで俺なんだよ」

「いやね。うちのクラスつてさ、ヤバいじゃん？」

「ハッキリ言うな」

実際、そうなのだからあまりキツくは言えないのだが。

「唯一マシつて言うか……安心して任せられるのが君か中野さん、上杉くんぐらいじゃん？でも今回の林間学校、実行委員会の仕事は肉体労働が多いみたいなんだよ

ね。それを考慮すると、女の子の中野さんはなし。上杉くんは見るからにヒョロヒョロ

「そんで俺か」

「まあ、そういう事だね」

消去法のすえ、辿り着いたのが自分だったらしい。

「はあ………実行委員って、具体的に何すんだよ」

「えーつと、確か林間学校中の全生徒の点呼確認。食材の準備から肝試しに使うルートの確認と立ち入り禁止場所の整備。キャンプファイヤーで使う木材の確認と準備くらいかな」

「ほとんど雑用じゃねえか」

「僕達教師陣もある程度協力するけど、如何せん生徒たちの自主性を伸ばすためらしいから、そこまで協力出来ないんだ」

聞けば聞くほどやりたくない衝動が湧き上がる。完璧な肉体労働、ブラックだ。

役得なんてものではない。

(どうりでやりたがらねえわけだ………)

「ま、君なら何とかなるでしょ？てことで、放課後に委員会の集まりがあるから遅れないようにね」

なし崩しで実行委員会に選出された輝は思い切り息を吐いた後、職員室を後にした。

放課後————

「輝、行くぞ」

「わりい、実行委員」

輝の返答に風太郎は目を丸くした。

「え、マジ？」

「おう」

「家庭教師どーすんだよ」

「お前に任せる。林間学校終わるまで行けそうにねえ」

実行委員の資料を片手に持ち、教室に固定してある時計を見ると、集会が始まるまであと残り十分を指していた。

「ま、そーゆー事だから」

「あ、おい………！」

逃げるようにその場を後にする輝は、風太郎の制止を聞かずに出て行った。

夕焼け色に染まる教室に風太郎のため息が響いた。

程なくして集会も終わりを迎えた。そのほとんどが全く関係ないものだった。『肝試しをするとかチの幽霊を呼び寄せるから面白そう』やら、『キャンプファイヤーの伝説って本当なのかなあ』やらこんな感じの雑談が一時間にも及んだ。

既に外は徐々に夜の帳が居り始めている。

「帰るか」

時間を見ると17時を回っていた。家庭教師をやりに行こうかと頭の片隅で考えていたがこの時間ならもう終わっているだろう。

自身の教室へ着くなり、さきつと帰る支度を始めていると隣のクラスから会話のような声が壁越しに聞こえてくる。普段なら絶対聞こえないような音量だが、今この学校に残っているのは実行委員会と少数の教師。おまけに二学年の教室が並ぶ廊下は不気味なくらい静まり返っている。明かりが徐々に夜の帳に支配されつつある夕焼けだけのため、その不気味さをより一層際立たせていた。

柄にも無く恐る恐る隣のクラスを盗み見た。

視認出来るのは精々三人という人数だけ。顔は自分がいる所からでは分からない。

(誰だよ、こんな時間まで残ってるの……)

「返事くらい待ってやれよ。少しは人の気持ちを考えて」

(あ……? 喧嘩か……?)

暫し逡巡する。

このまま帰つてもハッキリ言つて暇だ。ならここで知らない奴の喧嘩を盗み聞きするのも悪くないと思い、近くで聞くために移動する。

傍から見れば泥棒さながらの抜き足の腕前。副業で始めようかしら。

なんとか会話を聞き取れる位置に移動し、聞き耳をたてる。

?????
 ☒???
 ???
 ??*??*
 *

ふんふん、なるほど。

どうやら一人の女の子を巡つて論争をしているらしい。キャンプファイヤーの伝説を信じているなんて、男の癖に中々メルヘンチックな頭をお持ちのようだ。

先程から『んだコラ』とか『やんのかコラ』とか『ジョトダコラ』とか言っているあたり、男の一人はオラオラ系だ。対するもう一人の男は冷静に対処している。女の子はさつきからあたふたしていた。

(さてさて、どんなヤツらだ……ん?あのオラオラのヤツ、隣のクラスの前田か?それで、女の方は……一花?その隣は、ガリ勉……?)
 ?なんだ、修羅場か?いや、そもそも一花とガリ勉……)

ドアの小窓からそつと顔を出し、三人の顔を見ながら考える。

(んなことどうでもいい。いいもん見れたし、帰るか)

これで一花の弱みを握り、扱いやすくなると思うと自然と足取りが軽くなる。不敵な笑みを浮かべながらその場を離れようとした瞬間、思い切りドアにぶつかってしまった。

「あ」

物音に気づいたのか、閉じてあつた教室のドアが開く。

そこで丁度三人の目線と輝の目線が合致した。

「……………」

「……………」

ものすごい苦笑いを浮かべながら手を振った。

おのれ天宮アアアア!

という言葉が聞こえてきそうな程、睨みをきかせた前田が横切り、そのまま昇降口に行つてしまった。

「……………いいの? アイツ行っちゃったぞ?」

「いい。助かった、輝」

「お、おお……お……お……」

完全にお邪魔をしてしまった輝は何とも言えない顔で頷く。

「こんな時間まで何してたんだけ？」

「実行委員の集会があるつったろ」

バックを肩にかけ、風太郎の横にいる一花を見た。

「な、なに？」

「いや、なんでもない」

「………?」

「んじやな」

そう言つて輝は風太郎の横を通り過ぎる瞬間に、耳打ちした。

「ちゃんと線引きはしとけよ」

「………っ!」

風太郎は勢いよく振り返り、弁明しようとしたが輝の背中は暗闇が覆う廊下の中に消えてしまった。

「どうしたの? フータロー」

「盛大な勘違いをされた」

「え？」

風太郎は額を抑えながら項垂れた。

この勘違いが解かれるのはもう少し先の話。

「あのガリ勉強野郎、性根の腐ったチキン野郎かと思っただけど存外隅に置けねえな」
絶賛勘違い中の人物は軽い足取りで口笛を吹きながら帰路を歩いていたとき。

?????
☒??
??。
?? *??
*??
*??
*??

何の気なしに家の玄関を開けると、見知らぬローファーが一足あるのに気づく。

姉か妹の友人でも来ているのかと気にもとめずリビングのドアを開けた先にいたのは、予想外の人物だった。

「おかえり、お兄」

「遅かったじゃない」

「ちよつとな」

凜と優の顔を横目に捉えながらソファへ足を運ぶ途中に視界の隅に、長い髪を蝶を模したリボンで結った人物を捉えた。

「お邪魔してまーす」

「おう………って、何してんだよ。お前」

凜の隣に座る二乃を見ながら眉間にシワを寄せる。

「あー、実はね。二乃ちゃん、ピアス開けたいらしいの。でも一人で開けるの怖いらしくて」

妙に色づき出した生徒に怪訝な顔を向ける。

「うちの学校、ピアスはアウトじゃなかったか？」

「う、うっさいわね！」

「そうだよ！お兄！女の子がオシヤレして何が悪いの！」

「そーだそーだ！朴念仁は黙って指をくわえて見てなさい！私が二乃ちゃんの耳にピアスの穴を開ける瞬間を！」

人の耳に穴を開けることを指をくわえて見てろという人を初めて見た。

しかし、ああは言っているがピアッサーを持つ手が震えているのを見逃さない。

恐ろしく速く震える手、俺でなきや見逃しちゃうね。

「い、行きます………！」

「お、お願ひします………！」

「ドキドキ………！」

いつまで経っても一向に行動に移さない凜に輝は業を煮やし、ピアッサーを取りあげ

た。

「貸せ」

「あ、ちよ……!!」

目をつぶつてビビっている二乃の左耳にパチンツと軽やかな音が響いた。

「姉貴、ファーストピアス」

「え、あ、はい」

凜から渡されたピアスを受け取り、先程開けたピアスホールにそつとはめた。

「おら、出来たぞ」

「え……あ、終わり?」

手鏡で見ると、左耳の耳たぶに確かにピアスがあつた。

「ホールが落ち着くまではずつとそれ付けてろ」

「ずつと? お風呂も? 学校も?」

「つたりめーだろ、いちいち取り外してるとホールの完成が遅れんだよ」

『へえ』と関心するように手鏡でいろんな角度から見ている二乃はふと思つた。

「あんた、なんでそんなに詳しいの?」

「あ? あく……」

「コイツ、中学の時に一回開けてんのよ」

「マセてたもんね、お兄」

「うっせえな……」

輝にとつてはあまり思い出しにくい事なのか、明後日の方向を向いていた。

「あ、二乃ちゃん。ファーストピアスの間の耳のケア教えてあげるから洗面所に行きましょ」

「あ、はい」

凜の後を追ってリビングを後にする二乃の背中を見送った後、制服を乱雑にハンガーに掛けた。

「二乃さん、どうしたんだろうね。急にピアスを開けてほしいなんて」

「林間学校が近えからじゃねえの？知らねえけど」

「もしかして……！好きな人でも出来たのかな……」

「さあ？」

「憧れちゃうな」

輝はおもむろに自分の左耳の耳朶を触った。

ピアスのホールはすっかり塞がっており、少し凹んでいるのを指先で感じる。

「好きな人ねえ……」

耳を弄りながら学校での一件が頭をよぎった。

「家庭教師として、生徒さんの恋愛をどう思っていますか？」

「どうって……」

急に目の前に来ていた優に詰め寄られること数十分、凜と二乃が帰ってきた。

「大丈夫よ、二乃ちゃんなら」

「あ、あの……！別に、そういう訳じゃ……！」

「自信持ちなさいな」

笑顔を浮かべている凜となぜか顔を赤くしている二乃に輝と優は首を傾げた。

????
 ☒??
 ??° ??*??*
 * *

「今日はありがとう。なんかお礼したいんだけど今手元になにもなくて……」
 「別に気にすんな。んじやな」

二乃を自宅の高層マンションまで送り、踵を返そうとした瞬間、

「ま、待って！」

「あ？んだよ」

「じ、実行委員頑張んなさいよね……じゃなくて……！しつかりしなさい、私……！」

「・・・・・・・・・・?」

一人劇場を開演させた二乃を待つこと数分————

なんとか、言葉を絞り出した。

「きや、キャンプファイヤー・・・・・・・・」

「おう、キャンプファイヤー」

「だから・・・・・・・・！キャンプファイヤー・・・・・・・・！」

「おう。キャンプファイヤーがどうした」

「~~~~~ツ!!もう察しなさいよ！このバカ！」

そのままマンシヨンの中へと駆け足で消えて行った二乃に取り残された輝は『わけがわからないよ』顔でその場に立ち尽くしていた。

「ふう〜〜〜〜。すつかり遅くなっちゃったなあ」

今日は学校が終わった後、女優の仕事があったため放課後の勉強会は参加しなかった。

前回の中間試験であの様だったため、勉強しなくてはいけないことは重々承知しているのだが————

(三玖の事も気になるし、帰ったら聞いてみようかな)

クラスの子から呼ばれていたが仕事があつたため三玖に変装して行ってもらつたのを思い出し、早足で姉妹がいるマンションへと向かう。

途中コンビニで買った姉妹五人分のデザートが入つた袋を大事に持ち直し、いよいよマンションが視界に入つた瞬間、

「あれ?」

よく知る人物がマンションの玄関前で立っているのが見えた。

「ヒカルくん?」

見知つた顔に自然と足取りが軽くなる。

不意打ちのような形で出会いについ頬が緩む。

近くに行き話しかけようとしたが、

「え?」

心臓が飛び跳ねるような衝撃を感じながら、足を止めた。

もう一人、よく知る人物――次女の二乃がそこにいたのだ。

「.....」

理由はわからない。だが、二乃を見た瞬間、体は勝手に動いていた。近くの遊歩道に生えた木々に隠れ、頭だけをそつと出す。

何かを話しているようで、聞こえる位置に移動する。何か悪いことをしているようで背徳感を覚えるが、生憎と今の一花はそれすらにも構ってられなかった。

そして、なんとか聞こえる所まで移動を終え、一息着いた所に一花の耳にその言葉が届いた。

「きや、キャンプファイヤー……」

「おう、キャンプファイヤー」

『キャンプファイヤー』という言葉聞いた瞬間、一花の胸がザワついた。

「だから……！キャンプファイヤー……！」

「おう。キャンプファイヤーがどうした」

「くくくくくッ!!もう察しなさいよ!このバカ!」

そのまま輝を置いてマンシヨンの中に消えた二乃。

置き去りにされた輝はその場に立ち尽くした後、首をかしげながらその場を去った彼を確認すると、何故か安心したかのように胸を撫で下ろす。

「キャンプファイヤー……」

胸のザワつきが収まらない。いや、先ほどよりそのザワつきが大きくなっている気がする。姉妹の前では見せない先程の二乃の顔は、『恋に恋する』乙女の顔そのものだった。

デザートが入った袋を握る手に力が籠る。

すると、携帯に一通のメールが届いた。

内容は、姉妹からの催促。『早く帰ってこい』との事だった。

返信を終え、携帯の電源を切るとその無機質の画面に映った自分に驚いた。

そこには目を鋭くして表情を強ばらせた自分がいたからだ。

「はは．．．．．参ったな．．．．．」

とてもではないが、こんな顔はあの子達には見せれない。

いくら女優としての仕事をしているとはいえ、作り笑いを作ってもあの子達には見破られるだろう。

再度携帯を取り出し、『ごめん。もう少し遅くなりそう』とだけ送り、一花は未だザワつく胸を鎮めるのと気分転換のために来た道に戻った。

Ep. 13 結びの伝説〜2000日後の君へ〜 初
日

「一組の生徒の皆さんはこちらのバスになりまーす」

学校の駐車場に、二学年全生徒を乗せるバスが連なる。各バスの乗り口には各クラスの実行委員が名簿でクラスの人数を確認しながら誘導していた。もちろん輝も自分のクラスが乗るバスの前で名簿に丸をつけながら誘導していた。

「バスん中は静かに騒げよー」

「静かに騒ぐとはこれいかに」

「天宮くん、お菓子持ってっていいー?」

「好きにしろー」

「この子酔いやすいんだけど、席前でいいかな」

「わかった」

クラスメイトからの質問に受け答えしながら手元の名簿にマークをしていく。

「輝、おはよう!」

「お、おう」

挨拶をした風太郎はいつもの落ち着いた雰囲気はなく、どこかはしゃいでいるような感じだ。あまりにいつもと違うため少したじろいでしまった。

「おはようございます」

「ん、五月で最後だな」

『中野 五月』にチエツクを入れ、担任の教師に手渡した。

「各クラス全員オツケーです」

「目的地の宿に着いたら明日の肝試しの打ち合わせのためまた集合しましょう。皆さん、林間学校がいい思い出になるように頑張ってくださいかなー？」

実行委員長の女の子のその言葉に『いいともー』とやる気があるのかわからないかわからない声で応えた。

何も面倒事が起きない事を祈るばかりである。

そして3泊4日の林間学校が幕を上げた。

――

「うお、すげえ雪だな……前が見えねえぞ」

「やっぱ山奥となると雪ふんのかな。でもまだ十月だぞ？」

「今年は異常気象だつてニュースで言つてたぜ」

もう一時間くらい足止めを食らっている。

しかし、バスの中はそんな事お構い無しに賑やかだった。

「雪！雪ですよ！天宮くん！」

「ああ。頼むから座りながら暴れんじゃねえ。さつきから脛に蹴りが——」

「雪!!」

「もういい……」

バスの窓にへばりつくようにつつき、雪を見ながら感嘆の声を上げている五月にため息を吐きながら項垂れた。

?????
 ☒???
 ?? *???
 ?? *???

「降雪が酷いので、今日はここの旅館で一泊します。一部屋五人、部屋割りは各クラスの実行委員がして下さいねー」

「うーし、お前ら部屋割りすつから集まれー」

輝の言葉にクラス『アマゾン』が集まり出す。

（天宮、分かってんだろーな．．．．．五月ちゃんと同じ部屋にしろ。いやせめて女子一人だけでも．．．．．）

（バカめ、五月ちゃんは俺と同じ部屋になる運命なのさ．．．．．）

（相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋相部屋）

分かってる。分かってるぞ、お前たちー

「女子は女子で決めてくれ」

「はい」

「裏切り者めえええええい!!」

「ざまアみろ!!今日はお前らの不幸でさぞ飯が美味いんだろうな!バアアア力!!」

「ちくしよおおおおお!!」

かくして部屋割りも終わり、明日に備えて旅館の中へと入って行った。

「非リアに優しくない部屋最低だな」

「同感だ」

「ずべこべ言うなっつーの」

荷物を置くと、一息つきながら体操着に着替える。

部屋割りの結果、輝、風太郎、田嶋、小野寺、山田の五人になった。

「体操着に着替えてどこ行くんだよ」

「実行委員の集まりがあんだよ」

各々荷物を置き終えると、畳の上に寝転がった。

「あーあ、五月ちゃんと同じ部屋が良かったなー」

「いやあ、多分っていうか絶対倫理せの守護者いたちは許さないんだろうな」

小野寺と山田の会話に田嶋も加わる。

「五月ちゃんマジ天使。てか中野さん姉妹全員聖女案件」

「いやいや、あのおっぱいで聖女は無理でしょ」

「くはっ!」

下劣な会話を始めた三人に輝と風太郎はため息を吐いた。

「夕飯までは自由だからな」

「へーい」

部屋のドアを開けると同時に目の前の部屋のドアも開き、その本人と目が合う。

「あ?」

「あら、天宮じゃない」

すると今度は右隣の部屋のドアが開いた。

「うわー!天宮さんお隣だったんですね!二乃達の部屋も近くだー!」

「え?」

今度は左の部屋のドアが開いた。

「うるさいですよ、四葉……って天宮くん!?なんで隣なんですか!」

「はい?」

はたまた今度は輝から見て右斜め前の部屋のドアが開く。

「あ、ヒカルだ。隣は二乃なんだ」

「そうね」

「なんで?」

次は左斜め前の部屋のドアが開く。頼む。頼むから違うと言ってくれ。

「残念!一花ちゃんでした!」

ああー何となくそんな気は、してたよー

「五人集合ですわね!」

「奇遇だね」

五人が談笑を始めるのと同時に輝は自身の部屋のドアを閉じた。

「あれ?天宮、行ったんじゃないのか?」

「……………」

小刻みに震える輝を見ながら風太郎、田嶋、小野寺、山田が首を傾げる。

「なアアアアんでだアアアアアアアアア!!!」

「なにになに?!?どうした天宮!?!」

「輝、落ち着け……!」

「悪夢だ…….何かの悪夢に違いねえ……!」

ほほへへ

輝から発狂した理由聞いた瞬間、田嶋、小野寺、山田の三人はそんな気持ちの悪い声を上げた。

「五月ちゃんだけでなく、他のクラスの中野さん達まで部屋が近くだとはな!」

「でかしたぞ!天宮!」

「どうやらこの戦い、俺たちの勝利のようだ!」

どんちゃん騒ぎを始めた三人を風太郎が宥めるのを見ながら実行委員の集まりを思いついた輝は、また再度ドアを開ける。

と、そこには二乃仁王立ちで構えていた。

「あ!やっと出てきた!なんで急に部屋に戻ったのよ!少しくらい話し相手になりなさい

「よー」

「んな時間ねえんだよー！」

逃げるようにその場を立ち去ろうとした輝の背中に重い衝撃が走った。

「四葉ターツクル！」

「おぶっ!?!」

盛大に転倒した輝を見ながらタツクルをかました当の本人は悪びれる様子もなくキヤツキヤツ笑っていた。

「ゲホッ．．．．．！四葉、てめえ．．．．．!」

噎せる胸を叩きながら、何とか起き上がる。

「だ、大丈夫ですか？天宮くん」

「こっちは急いんだよ．．．．．!構って欲しいならガリ勉のここに行け．．．．．」

「ゲホッ」

すると、携帯に着信が入った。

(うげ、佐藤．．．．．)

佐藤とは実行委員の委員長を務める女の子である。

「もしもしー」

『もしもしじゃなーい!!天宮くん今どこにいるの!?!』

スピーカーをオンにしていなくても関わらず、その檄は携帯のスピーカーをつんざいた。

『もう皆集まってるんだけど!!後は君だけなんだけど!!』

「い、今行く!」

『早く来てよね!』

ブツリ、と切れてしまった。

「と、とにかくまた後でな!」

「あ、ちよつと!」

逃げるように走っていく輝を二乃呼び止めようとしたがその声は届かなかった。

????
 ☒???
 ???
 ??*??
 ??*

「悪い……!遅れた……!」

肩で息をしながら集合場所に辿り着いた。

「遅……遅……!」

「まあまあ、大目に見てあげようよ。天宮くんだって色々事情があるだろうし」

「相変わらず堅物よね。カルシウム足りてる?あ、そうか!摂取してるけどそのほとん

どが頭に行ってるからそんなに堅物なのね？どうりでペツタンコなわけか、ペツタンコ」

「黙って聞いてれば舐め腐ってからに……！」

「落ち着けよ、天宮も困ってるんだろー？」

この個性が強すぎるメンバーが実行委員だと事実には頭が痛くなる。

言われ放題言われた佐藤という女の子は反論し始めた。

「残念でしたー！ペツタンコじゃありませんー！Bありますー！BよりのAですうー！」

「Bないんじゃない。元々Bあったというのがあなたの妄想なんですよ？お空から何かを受信して自分を魔法使いだと思っ込んでる人みたいよ」

「はう……！」

「うわあ……！」

「キツついな、相変わらず……！」

委員会の女の子の一人からクリティカルヒットを受けてしまった佐藤は完璧にいじけてしまった。

「言われなくてもそんな気はしてたよ。わかってるもん。同じクラスの四葉ちゃんの方がおっぱい大きいことぐらい……あ、でも別に羨ましくはないよ？こうなったら逆に開き直ってやるんだから。……はあ、私って、ほんとバカ」

「おい、委員長がアレでどうすんだよ」

「言ってくれるな、天宮。今はそつとしてやってくれ」

「うん。開き直ってやるって言ってるし。そのうち復帰するよ」

絶賛いじけ中の委員長を置いて、明日の肝試しの打ち合わせは滞りなく進み、終わりを迎えた。

「それじゃあ、また明日ねー」

佐藤と同じ部屋の女の子が佐藤を引きずりながら手を振る。

輝も自分の部屋に戻るため、前に来た廊下を歩く。

廊下のガラスの窓からは空から舞い落ちる雪がライトに当てられ幻想的な風景を作っていた。

横目でそれを見てみると、自分の部屋にたどり着きそのドアノブを捻り開けた。

「お前らそろそろ飯だぞ」

「お、お帰り。天宮」

「飯だ飯！」

するといつの間にか輝の後ろにいた一花が肩を叩く。

「あ？んだよ、お前かよ」

「これからヒカルくんたちも飯？」

「ああ」

「よかったら一緒にどう？みんなで」

すると今度は横から四葉が顔を出す。

「今なら私も一緒ですよ！」

「私も」

三玖に続き、二乃、五月と次々顔を出す。

「いや、でも……」

少し難色を示すが後ろの男共が黙っていなかった。

「FF外から失礼するゾ☆アリかナシかで言えば一緒にご飯食べるのは拙者にアリ

アリのアリでござるゾ」

「話は聞かせてもらった！自分も一緒にいいですか？」

「俺も一緒にさせてください！なんでもしますから！」

「だそうだ、輝」

「んじや、一緒に食うか……？」

何やらガツポーズをしている二乃らしき人物がいたが見なかったことにしよう。

既に前途多難な林間学校に思えてしまい、輝は深い溜息を吐いた。

E p. 14 結びの伝説〜2000日後の君へ〜 2日
目

「今日は肝試しがあります！夕飯は全クラスでカレーを作るから実行委員はよろしくね」

学年主任の言葉を最後に、ルートの下見と案内の看板設置を任された輝と委員会の女子は

林の中に入っていく。

「案外足場は悪くないんだな」

「そうだね。これなら転ばなくても大丈夫そう。あ、そうだ！天宮くん！」

「あ？」

おもむろに委員会の女子が後ろを振り向き尋ねた。

「キャンプファイヤー誰かと踊るの？」

「いや、踊んねえけど」

「そうなの？天宮くんモテるのになんか意外だなあ」

「それ関係あんのか？」

「実際どうなのさ〜」

うりうりと肘で小突いて来るのを払い除けたため息を着きながら、

「生憎そうゆうの信じねえタチでな。あー、なんだっけ。キャンプファイヤーのアレ」

「うわあ、冷めてるー」

「うっせえな」

やいのやいのと話しているうちに林を抜け、開けた場所に出た。

「うわあ・・・崖だ」

「こつちに來れねえようになんか立てとくか」

「そうだね」

「そう言うお前の方はどうなんだよ。誰かと踊んのか？」

立ち入り禁止の看板を立てながらそんな事を聞くと、少し考えた後笑顔が浮かべた。

「居ないんだよねえ」

「ふーん」

「あ、聞いてきたのに大して興味ない感じ？」

「おう」

「酷すぎる」

喧騒が響くコテージの傍にある炊事場。全クラスを収容できるスペースがある程広い。

「じゃあ、私たちがカレー作るから男子は飯盒炊さんよろしくね」

「うーい」

二乃の指示に同じ班の男子が気だるげに返事を返す。それを見届けたあと、袖を捲り気合を入れた。

「わっ、二乃野菜切るの速っ」

「家事やってるだけの事はあるね」

「これくらい楽勝よ」

クラスメイトの感嘆の声に気を良くしたのかその顔は微笑んでいた。

（ついに始まったわね、林間学校）

ふと、二乃の脳裏に他の姉妹たちが過った。事実、家事は二乃が負担しているため他の姉妹たちはからつきしなのだ。

「あの子たち、上手くやってるかしら」

「天宮ー、野菜どーするー!?!」

「適当にぶつ切りで放り込め！カレーなんざ何入れても変わりやしねえんだからよ！」

「ヒヤッハー!!」

「天宮くんたちの所、随分テンションが高いね……………」
「そうね……………」

一花

「この計量カップもう使った？片付けておくね」

「は、はい！」

後ろ姿の一花を見ながら男子は小声で話し合った。

「中野さん、美人で気が利いて完璧超人かよ」

「俺の部屋を片付けて欲しいぜ」

余計汚くなるのでやめたほうがいいですよ。

四葉

次々と火起こしの薪を割っていく四葉を班の人が止めに入る。

「いや、割りすぎー！」

「あはは、これ楽しいですね！」

すると、四葉の元に輝と同じ班の田島と小野寺がやって来た。

「カレーといったらもう役割論理以外ありえないwww」

「ありえませんかwww」

「このボケナス共が！訳わかんねえこと言ってるねえでさつさと薪持ってこい！」

遠くから輝の罵倒が飛び、肩をすくませる。

「へいへい。四葉ちゃん、薪貰ってくよ」

「はい！」

五月

「そろそろ煮込めてきたかな」

「待ってください！15分まであと3秒です……！」

鍋の前で携帯とにらめっこしながら真剣な顔で言った。

「細かすぎだよ……」

三玖

「三玖ちゃん!?何入れようとしてるの!？」

「お味噌。隠し味」

「カレーに味噌なんて入れないよ!？」

輝は米の炊き具合を見に来たが、思わぬ人物に遭遇した。

極力目を合わせないように隣にしゃがみ、沈黙を貫いていたのだが、

「おいコラ」

「うし、飯はいいな」

「気づかないフリしてんじやねえぞコラ。俺を忘れたとは言わせねえコラ」

「コラコラうつせえな。前澤だろ?」

「前田だよ!」

しばしの沈黙――

「お前、一花に振られた見てえじやねえか」

「ふ、振られてねえよ!てかお前、なんで中野さんを下の名前で呼んでんだよ」

「お前も呼べばいいじやねえか」

「お、畏れ多いだろ!」

「何が畏れ多いんだよ、あんなドン・ズボラの」

「え、ズボラ……?」

「ヒーカールーくん?」

「お前知らねえのか? アイツの部屋はもう汚いのなん……の……の……」
 後ろを振り返れば、いつもヘラヘラした顔の一花ではなく、顔は羞恥と怒りが入り混ざった顔で見下ろしていた。

「一……花……さん……」

「ごめんね、前田くん。ちよつとこの人借りてくね」

「あ、はい……」

首根っこを掴まれながら引きづられていく輝を見ながら前田は目線を戻した。

「ご飯、まだかな」

?????
 ☒???
 ??*??*
 ??*??*
 ??*??*

次第に日も落ち、いよいよ今日の目玉の肝試しが始まる。実行委員は衣装に着替え、ルートの要所に隠れ、脅かす係も担っている。

「イチャコラしてるカップルの仲を裂くが如く遠慮なく驚かせ! 分かったか野郎ども
 !」

「委員長気合い入ってんな」

「ちっさい女ね」

「そこ！私語を慎め！あ、今日の肝試しの助っ人を連れてきました」

「そっちが後回しなのね」

全員がため息をつく。

「私が来たからには百馬力です！」

「ここ一番で一番頼りにならないそうなのやつが来たか。しかも馬力ってなんだよ、車か」

「んな！酷いですよ！天宮さん！」

何やら抗議してくるリボンバカを無視し、変装に着替える。

「うし、行くか」

「皆さん、行っちゃいましたよ？」

「え？」

「天宮さんは私とペアです！行きますよお！」

四葉に腕を引っ張られ、林の中に入っていく。さすがに山奥だけあって、日が沈むのも早い。

「おい、四葉。あんまりはしゃぐな、転げんぞ」

「大丈夫ですよ！」

と言っているそばから木の根に躓き、前のめりになるのを腰と手を掴み若干イナバウアーの姿勢になってしまったが、許して欲しい。

「言わんこつちやねえ。氣いつけろつつたろ、アホ」

「ご、ごめんなさい……」

「立ってつか？」

「は、はい」

さつきと打って変わってしおらしくなった四葉に疑問が残るが今は深く考えずにしておいた。

「ここが俺らの持ち場か」

「結構不気味ですね」

「ここ出るらしいしな」

「ホントですか!？」

「ウソです」

「ウソなんですか!？」

「ホントです」

「えー！ホントなんですか!？」

「お前忙しいな」

百面相の如く色々な表情をする四葉に思わず笑ってしまった。

「あ！なんで笑うんですか！」

「いや、お前面白いから」

『わりいわりい』とむくれている四葉をなだめ、持ち場である場所の木陰に身を隠した。遠くから生徒の絶叫が聞こえているあたり、既に肝試しは始まっているらしい。

「あの、天宮さん」

「んあ？」

おもむろに話しかけてきた四葉に顔を向ける。

「キャンプファイヤー踊る人、見つかりました？」

「いや？」

「き、ききき奇遇ですネ！私もです！」

「それがどうしたんだよ」

妙に歯切れの悪い四葉に眉をひそめ、ある事に気づいた。

「踊る人探してんのか？」

「ま、まあ、そんなところです……」

「大変だな、お前も」

しばしの沈黙の後、四葉が静寂を切り裂いた。

「天宮さん」

「ん？」

「私と……踊ってくれませんか？」

月下で四葉と目が合う。

いつもと違う真剣な顔でこちらを見つめる彼女に輝は言葉を失った。

E p. 15 結びの伝説～2000日後の君へ～ 2日目

読んですぐ分かり尚且つ分かりやすい前回のあらすじ

林間学校が始まり、肝試しの助っ人として呼ばれた四葉。ひよんな事から四葉と一緒に
なってしまうた輝に思いがけない誘いが来るのと同時に地球を滅ぼす程のエネルギー
を持ったパンドラボックスがついに開かれた！その力を操る地球外生命体エボル
トの前に仮面ライダーが立ち塞がる！

(ピロロロロロロ……アイガツタビリー)

登場人物

中野 一花

『この女……スケベ過ぎる！』を体現した中野姉妹の長女。実は策士。寝る時は
基本裸らしい。何かと『姉』と称して世話を焼きたがる。姉を名乗る不審者とは彼女の
事かもしれない。闇一花に変身することが出来る。

中野 二乃

『おめーの居場所ねーからwwwwww』の如く初手睡眠薬をかましてくる中野姉妹の次女。テンプレのようなツンデレだが、実は恋に恋する歳相応の乙女である。恋の暴走機関車になるのはまだ先の話。

中野 三玖

根暗のように見えるが、開けてみればなんとやら。ラブコメの王道を行くまさに正ヒロイン力を発揮する中野姉妹の三女。料理の腕は壊☆滅なのだが、そこはご愛嬌。可愛いは正義の如く許される。歴史大好きっ子の歴女である。

中野 四葉

一言で言えばアホの子。アホだけど憎めない。過去の出来事からイキリボンと密かに言われている。語呂がいい。猪突猛進の如く元気一杯の中野姉妹の四女。うさぎ調のリボンがトレードマーク。滅私奉公気味。どこぞの赤毛の少年のようにならないといいな。リボンが本体。

中野 五月

『肉まんに親でも殺されたんか』と言わんばかりに肉まんを食い漁る、ドメスティックバイオレンス肉まんおぼけその人。ごじよじよの愛称で親しまれている中野姉妹の五女、末っ子である。何かと難しい言葉を使いたがるが意味はわからない。

五人の体重は合計250なのだが、つい先日251だったらしい。

曰く、『四人から疑いの目を向けられるのは極めて遺憾。起訴も辞さない（でも意味はわからない）』と言っているらしい。

◇◆*◇*◆*◇*◆*◇*◆*◇*◆*◆*

「私と……踊ってくれませんか？」

月下に照らされた四葉と目が合う。いつもと違う真剣な顔に、彼女が何を思っているのか分からなかった。

「……………」

「あ、あの、黙りされると照れると言いますか……………」

「お、お。悪い……………」

四葉の言葉に意識を戻され、その顔を見た。こちらの返答を待っているのかこちらをじっと見つめている四葉にプレッシャーを感じたのか輝は葛藤する。

（予想外だ……………コイツがあんな事を言うなんて……………そもそもなんで俺なんだ？口は悪いし（自覚あり）、気の利いた事なんて言えねえのに……………この顔は本気

で言つてやがんのか……？俺に？正気か？……正気か？（2回目）

だが、そんな考えとは裏腹にせつかくの誘いを断るのも何か悪い気がしてしまい、

「お、俺でいいならいいぞ」

「ホントですか!？」

結局承諾してしまった。

その返事を待つていたかのように聞くやいなや四葉の顔はパーっと明るくなる。

「これでまた一つ楽しみが増えましたっ！」

「そいつは何よりだな……」

笑顔が眩しいんじや。

『守りたいこの笑顔』とよく聞くが何となくわかった気がする。

「あ、天宮さん見てください！」

「お？ありや一花と三玖じゃねえか。準備すんぞ！」

「Hey! Sirii！」

「あ!?!おま……!何してんだよ……!」

突如四葉がスマホの電源を付けた。

「いやー、思い切り脅かす方法を調べようかと」

「今!？」

「YouTube開いて！」

「動画!?動画を観んの!？」

「私、文字だけじゃ覚えれないんで見て覚えようかと！」

「いい心がけだ。感動的だな、だが無意味だ」

(^ U ^)

すったもんだをしている四葉と輝を見ながら一花と三玖は頭を傾げた。

「何してるんだろう、あの二人。お化け役なのにガッツリスマホのライト見えてるよ」

「きつと四葉が何かやり出したんだと思う」

三玖の答えに一花は苦笑いを零した。

「あ、ああ天宮さん！この広告、スキップ出来ません！」

「頼むからスマホを消せ！じやなきや音量下げろ！」

『社会人一年目のKENTYです！』

「うるせえバカ！」

スマホ片手にあたふたする四葉。パチモンVtuberに向かって怒る輝。それを見ている一花と三玖。

「何してるの？二人共」

「「あ」」

一花の問いに二人は固まる。しばしの沈黙は四葉が切り裂いた。

「じゃ、社会人一年目のYOTSUTYですよ！がおー！」

「もう遅えよ」

社会人一年目あたりのやつは突っ込まないでおく。

◇◆*◇*◆*◇*◆*◇*◆*◆*

「こんの、ポンコツリボンが！お前がスマホの電源さえ切つてればバレずに済んだのに！」

四葉のリボンを掴みブンブン揺する。『あうあう』と何か言っているが気にしない。

「落ち着きなよ、ヒカルくん。四葉が可哀想だよ」

「ヒカル、めっ」

「犬か、俺は」

三玖が頬を膨らましながら人差し指を前に出す。

三玖推しのニキ達にはたまらん顔だろう。

「四葉をいじめちゃダメ。だから、めっ」

前に出した人差し指で輝の頬をつつき、それを見ていた一花も頬をつつき出した。

「ヒカルくん、頬っぺ柔らかいね！」

「めっ。めっ、だよ。ヒカル」

ツンツンを止めない二人にされるがまま数十分。

「じゃあ、頑張つてね〜！」

「てめえら何しにきたんだよ！おい！待ちやがれ！」

満足した顔で二人はその場を後にした。その背中を睨みながら見送っていると、後ろからの視線が突き刺さる。

「……………なんで不貞腐れてんだよ、お前」

こつちもこつちで頬を膨らませていた。心無しか、リボンも四葉の不機嫌を現しているかのようひん曲がっているように見える。

「私は今おこです！怒ってるんです！」

「うん、なんで？」

「怒ってるんです！なぜか分かりますか？天宮さん！」

「いや、わかんねえから聞いてんだよ」

「なら仕方ありませんね！教えてあげません！」

「だから何でだつて聞いてんだよオ！」

会話のキャッチボールが出来ていない。もはやドッチボールと言つてもいい。

その後は八つ当たりの如く他の生徒達を脅かしまくった。幽霊が苦手らしかった五月は阿鼻叫喚。置いて行かれた二乃はてんでこ舞い。それを眺める輝は愉悦の一言。天宮輝の功績によつて肝試しは概ね成功といえよう。

「いやー！脅かした脅かした！」

「凄かったです！天宮さん！」

肝試しも無事に終わり、帰り道を四葉と並んで歩く。コテージに戻ったらこれから実行委員会はキャンプファイヤーの準備に取り掛からねばない。

「んじゃ、キャンプファイヤーでな」

「あれ？スキーはしないんですか？」

「委員会の別の仕事あるからな」

「私も何かお手伝いしますよ！」

「いい。折角の林間学校だろ。お前は楽しみな」

「えっ！天宮さん、今日は優しいですね！頭打ったんですか!？」

「はっはっは。この顔から笑顔が消えた瞬間死ぬと思え」

「ヒエ……いつも通りでした……」

怖がった顔の四葉の頭に手を置き、わしゃわしゃと撫でる。

「んっ」

「冗談に決まってるんだろ」

「むう、私で遊んでませんか!?子供じゃないですよ!」

「はいはい。お子様はさっさと寝な〜」

ヒラヒラと手を振りながら歩いていく輝に四葉はさらに頬を膨らませる。

「バカ・・・」

ぼそりと呟いた言葉は届くこと無く虚空へ消えるだけだった。

—————

「あーまーみーやー!!」

「やべっ、ターボ二乃だ・・・!」

外でキャンプファイヤーに使う木材を出している輝の元へ、華麗な横滑りでやって来た二乃に思わず引き気味になる。

「さあ!私と踊るって言いなさい!」

「なんでそんなに必死なんだよ!」

「必死にもなるでしょ!あっ!逃げるんじゃないわよ!」

「いい!来なくていいから!あっち行け!」

「嫌よ!アンタが頷くまで離れない!付きまとってやる!」

「正気の沙汰じゃねえよ！止まれ！止まれ！と、止まんねえ！」

ガツチリ体を二乃に掴まれ、必死になつてゐるため気づいていないのか腹の辺りに柔らかないもの押し付けてゐるため輝も下手に引き剥がせない状態になつてしまつた。

「やつと捕まえたわよ！」

「暑苦しいわ！離れろ！」

「やだ！離さないんだから！」

「こんなとこ誰かに見られてみる!?俺とお前の学生生活が……」

視線に気づき、そちらを見れば実行委員の委員長佐藤がこちらを見ていた。

まるで背景に宇宙が見えるような顔で。

スペース佐藤の出来上がりである。

「見せびらかすなアアア！」

「ほれ見ろ！一番めんどくせえヤツに見られた！」

「いつからよ！」

「あ!?!」

「いつからそんな関係だったの！」

「あれは確か雪が降る寒い日の事よ……」

佐藤の言葉に抱きつく二乃が何やら懐かしむ様な顔で語り始めた。

あることない事を話し始めそうな二乃の口を強引に手で押さえつける。
もうやだこの次女。

「さ、佐藤！こいつは助っ人だ！ほら、人手が足んねえって言ってただろ!!」

「ええ、ホントにござるかあ？」

「助っ人だつてんだろ。文句あんのか？（一転攻勢）」

「いえ、全くありません。すみませんでした」

ニヤニヤ顔だった佐藤の顔が瞬時に真顔に変わる。

「と、とにかく！イチヤイチャはご禁制だからね！ちきしよーめ！」

捨て台詞を吐いて走っていく佐藤を見送りながら大きくため息を吐き、二乃を見る。

「着いて来てもいいけどよ、その分手伝ってもらうからな」

「分かってるわよ。半分そのつもりだったし」

「そうか。んじゃ、ちょっと来てくれ」

二乃を連れてしばらく坂道を歩く。この先に木材を置いてある倉庫があるのだ。

倉庫に着くと輝は手に持っていたクリップボードを渡した。

「このチェックシートにマーク付けてくれよ」

「え？そんなのでいいの？」

「手汚れんの嫌だろ？それに折角の服も汚れたらたまつたもんじゃねえからな」

懐中電灯の明かりを付けながらせつせとキャンプファイヤーに使う資材を出している。

それをぼーつと見ていた二乃の視線に気づいたのか手を止めて振り向いた。

「どした？」

「えっ!? あ、ああいや、なんでも……」

「悪い、寒いよな」

『ほれ』と言いながら着ていた体操着の上着を二乃渡した。

「今はそれで我慢してくれ。もう少しで終わるからよ」

「あ、ありがと……」

「へっ、気にすんな。ヘックシ!……冷えてきたな」

『うおー、さぶさぶ』と言いながらまた作業に戻る。それを見ていた二乃は思わず吹き出した。

「んあ? なに笑ってんだ？」

「いや、アンタが面白いから……! てか、なんで半袖なのよ……!」

「はあ……? 動くと思つて」

「なにそれ! ははは! ……ふう。全く、世話の焼ける教師ね」

「世話かかんのはお前らの方だつーの」

輝の隣にしゃがみ込む二乃に頭を傾げた。

暫く沈黙が続くと徐ろに二乃が口を開く。

「……………ねえ」

「んー？」

「楽しいわね、こういう下らない話で笑えるのって」

「なんだよ、急に。熱でもあんのか？」

「別に。ただそう思っただけ。アンタはそう思わないの？」

「……………そうだな。案外、楽しいかもな」

「んふふ」

隣を見るとそこには顔を覗き込むような形で微笑む二乃がいた。

「今日はえらくご機嫌だな」

「そうね。今は気分がいいわ」

「そいつは良かったな」

「なんで分かる？」

「さあ？分かんねえ」

すると二乃は顔を輝の耳元に近づけそつと呟いた。

「教えない」

「ほあ!?! てめえ!いきなり耳元で喋んな!背筋がゾワゾワすんだろ!」

耳元を押えこちらを睨む輝を見てまた笑ってしまった。

やはり今日はえらく気分がいい。

「ふざけやがって……!ヘックシ!ああ!寒い!」

「寒いなら戻ればいいじゃない」

「出したもんは片付けなきゃなんねえだろ」

すると、ふと何かを思い出したかのように輝は二乃を見た。

「なに?」

「上着、やっぱ返してー!」

「やだ」

「だよなあ」

「林間学校終わるまで返してあげない」

「それは普通に困る。コテージ戻ったら返してくれよ」

「えー」

「渋るな渋るな。即答で『わかった』って言えよ」

いつにも増してご機嫌の二乃に戸惑いを感じつつ、やっとの事で片付けも終わり二乃からボードを受け取った。

「よし。んじゃ、帰るか」

「あ、待って！」

「なんだ？」

「あそこ、物音がしたんだけど……」

倉庫の出口で二乃が指さした場所を照らすが無かった。

「なんもねえぞ」

「嘘よ！ホントに音がしたんだから！」

「……じよ、冗談も程々にしとけよ」

「あ、あら？もしかして怖いの？」

「は、はあ？怖くねえよ！お前は逃げてもいいんだぞ？」

「アンタこそ、か弱い女の子を置いて逃げないでよね」

「聞き間違いか？か弱い女の子はどこにもおりませんが」

「アンタ張り倒すわよ」

言い合う二人を鎮めるかのように今度は確かに何が動く音が聞こえた。

「いやあ！私もう無理！先帰るーッ！」

「えっ!? あっ、ちよ！」

まさに電光石火の如く速さで逃げる二乃に取り残された輝は呆然と立ち尽くした。

「あんの野郎……!!」

倉庫の中を恐る恐る懐中電灯で照らす。

「だ、誰かいんのか……?」

「俺だ」

突如、輝の真横から真顔の男が姿を現した。もちろんよく見れば風太郎なのだが、今の彼にはそんな事は関係なく、思い切り握り拳を振り抜いた。

「だアアアアア!!?!!こつち来んなアア!!」

「ちよ……!!待て、俺だ!ひかー!」

^ T O ^
 \ /
 ???? ????
 Be Continued...
 —

E p. 16 結びの伝説～2000日後の君へ～ 3日
目 #中野三玖：オリジン#

登場人物紹介2

天宮輝

本作の主人公。旭高校に通う高校2年生。五姉妹の家庭教師として日々奮闘中。妹を溺愛しているためか、妹が絡むと知能指数が極端に下がる。

「ちよ．．．．．！待て！俺だ！輝！」

振りかぶって来る輝に何とか制止を呼びかけたがもちろん止まれるはずもなく、
「えっ!?ガリ勉、てめ．．．．．!」

『なんでお前がいるの?』という顔をしながら勢いよく倉庫の壁に激突した。

「フータローくん!?大丈夫!」

「あ、ああ。俺はな．．．．．」

風太郎が視線を横に向ければそこには額を押しさえつけながら転がる輝がいた。

「ヒカルくん?何してるの?」

「な、なんで一花までいんだよ．．．．．」

何とか立ち上がり二人を見る。ん？待てよ、倉庫に男女二人——瞬間、輝の頭に電撃が走った。

「あつ……ふーん」

もうちよつとね？場所を選んで欲しいところではあるんですがね？

事件の真相に辿り着いた某少年探偵ばりに顎に手を置いた。踵を返した瞬間、肩を目をかっぴらいいた風太郎ががっちり掴んで離さない。

「おい待て。何を察した」

「安心しな。俺は応援するぜ」

爽やか笑顔でサムズアップする輝に風太郎の顔が引きつった。

「くつ、顔がいいからか余計にムカつく笑顔だな……」

「アイツらには何とか誤魔化しておくからよ、邪魔者は退散するいやさせてくれ」

早口で捲し立て、今すぐにも四人姉妹に言いたいといった顔で逃げようとする輝を風太郎が阻む。

「お前なんか勘違いしてないか？」

「え、だつてお前からそういう関係じゃ……あ？そんな事より、なんで濡れてんだよ」

風太郎と一花は水を頭から被ったかと思うくらい濡れていた。

「なんか火災報知器が誤作動起こしたみたいだな」

「ふーん……おいガリ勉、デコ見せろ」

「は……?」

風太郎の前髪を掻き上げ、額に手を当てる。

「な、なんだよ」

「おい、一花」

「ふえ……?」

全く喋らなくなった一花が顔を上げると、僅かに頬は紅潮し、息遣いも若干荒くなっていた。

覚束無い足取りで近くまで来ると今度は一花の前髪を掻き上げ額に手を当てる。

「ガリ勉より熱いな……」

「風邪引いたのか?」

「こんな寒い中ですぐ濡れでいりや風邪も引くだろ。お前も予備軍だ。さつさとコテ

ジに戻んぞ」

すると風太郎を肩に担ぎ上げ、一花を抱き上げる。

「病人共は大人しくしてな」

「大人しくって……!持ち方つてもんがあるだろ……!」

「それは置いといて、予定より早くキャンプファイヤーの準備が終わりました！これもこの敏腕委員長である私のおかげって事よね！仕事も出来て、人当たりが良くて、こんなに笑顔がかわいい良物件の女の子を誰かもらってくれないかな？」

舌を少し出ししながらウインクしてる佐藤に全員が首を傾げた。

「何言ってるんだこいつ」

「放っておきなさい、天宮くん。売れ残りの戯言よ」

「売れ残りの戯言って……」

委員会のメンバーが佐藤から目を逸らし肩を小刻みに震わせている。

「んね？天宮くん。そう思うよね？」

「いや、俺に聞かれても」

「おーもーうーよーねー？」

「ひえっ……」

「まずいですよ！」

彼の何かがエマーゼンシーコールを発し、目の前の佐藤を力づくで押し返した。

「なんかよくわかんねえけど危なかった……」

「天宮、お前どうする？良かったら一緒にスキーでもしないか？」

委員会のメンバーの一人から誘われるがしばし考えた後、

「あー、悪いな。遠慮しとく」

「そうか？あ、さては二乃ちゃんのとこに行くのか？」

「ちげえよ」

口ではそう言っても二乃から上着を返してもらわなければとてもではないが風邪をひきそうだ。

二乃は後でとつ捕まえるとして、ひとまずコテージに戻る。自分を姉と信じて止まない一花の様子を見に行くためである。

「一花、入るぞ」

ドアを軽くノックし、開けるとベッドに横になる一花と見舞いに来ていた五月がいた。

「五月もいたのか」

「あれ？天宮くん？委員会のお仕事は終わったんですか？」

「昨日のうちに全部終わっちゃってな。今日はなんもすることないってさ」

「そうなんですな」

（それより、なんで半袖……？）

五月の疑問を他所に輝は一花のそばに居き、額に手を乗せた。

「まだ熱いな」

「いやー、ごめんね。こんな時に体調崩すなんてついてないな」

「引いちまったもんはしようがねえだろ。今日は大人しく寝てな」

「えー、でも最終日だよ？ キャンプファイヤーだよ？」

「はっ、どうせ踊る相手なんざいねえだろ」

「少しは言葉を選んで欲しいな……」

ただでさえ風邪で弱っているのに更に更に精神的にダメージを与えてくる輝に苦笑いを浮かべる。

「とりあえず今日は寝てろ。いいな」

「ぶーぶー、ヒカルくんぶーぶー！」

「何言ってるんだお前……あ、おい！ 服を引っ張んな！ 伸びんだろ！ 大人しくしろ！」
急に不貞腐れて服を引っ張り出した一花を宥めていると、また誰かがドアをノックした。

「一花、入るわよ」

もちろんその主は万年反抗期、妖怪面食い女こと二乃である。おまけにバツチリ輝の体操着を着ている。

「風邪ひいたんだって？ アンタもドジよね……あ」

「一花！ 服を離せ！ 良い子だからア……あ」

二乃と輝の視線が交わる。

目と目が逢う 瞬間好きだと気付く——

「やあつと見つけたあい……」

かなかった。

『目と目が逢った瞬間好きだと気付いた？ あー、ダメダメそんな都合のいい話許しませんよ』

悲しいかな、現実は無情である。

「あ、あー、なんかお腹痛いなあ。一花は大丈夫そうだし私トイレにでも行こうかしら。天宮と五月もいるし……」

「あ、おい！ 待て……！ 一花、いい加減服を……！」

「私病人。何してもいいと思うんだ、言うこと聞いて私を看病してよ」

「病人だからって何してもいいと!? ふぎけろお前エ！」

『病人は病人らしく黙ってる！ 殺してでも絶対安静だ！』

『パワーワードが過ぎるよ、ヒカルくん』

そんな二人のやり取りを傍で見ていた五月は微笑みながら一花の手を輝の服から離した。

「一花、あまり天宮くんを困らせてはダメですよ」

「むう」

「ったく………ありがとな、五月。………んな事より二乃だ！」

急いで部屋を出ると先程の喧騒が嘘のように静寂が満ちる。一花は少し名残惜しそうにしながら目を閉じた。

輝は辺りを見渡しながらコテージを出る。二乃がいつも付けている香水の匂いが僅かに鼻をくすぐった。

（馬鹿なヤツだ………あんなどぎつい香水を付けるなんてよ。見つけてくださいって言っているようなもんだ！）

～q～ソコニヤツガイルゾ

輝の嗅覚がコテージの近くにあるかまくらに二乃が居ることを示した。

「見つけたぞ、二乃！さっさと上着を………あら」

いざかまくらを覗いてみればそこに居たのは膝を抱き眠そうな顔をした三玖だった。

「あら………」

「何してんだ、お前」

「四葉から逃げてる」

「眠そうな顔してんな」

「元々こんな顔………って、失礼だよ、ヒカル。めっ」

「犬じゃねーよ。てかなんで四葉から逃げてんだよ」
「それが————」

。。。：+。。：+*。。：+*。。

四葉は現在、姉の三玖を探してコテージの周辺を歩き回っていた。

「どこ行ったんだろ」

良かれと思い鬼ごっこをしようと三玖を誘った。十数え終わり、いざ始めれば三玖が目の前から消えていたのだ。運動が苦手な三玖の事だから自分の視界から消えるはずはないのだが、

「三玖く。どこく？もしかして、遭難?!」

そう思うとトレードマークのリボンも四葉の感情に合わせてだんだんと元気を無くすように萎れてしまう。あわあわ辺りを見渡していると、いつもの見慣れた背中がかまくらに向かい何かを喋っていた。

（あーあれは！）

知らず知らずのうちに萎れていたリボンが天を衝くように立った。本人は知らないようだが心がびよんびよんするとリボンも連動してびよこびよこ動くようだ。出来れ

ばびよんぴよん待ちして欲しいところではあるが、そこは四葉。一度決めたら止まらな
いのである。

親しみと日頃の感謝を込めた四葉タックルをしようと、手首と足首を回し、軽い準備
運動をする。

「四葉が鬼ごっこしようって言ってきたから」

「運動音痴のくせに？」

「うるさい……」

痛いところを突かれ、そっぽを向いた。

一瞬その顔を見た瞬間、可愛いと思ってしまった。自分も相当疲れているのか、心
中で小さく毒づく。後ろでは今夜の晩飯を見つけた猛獣のように目を光らせた四葉が
戦闘態勢に入っていた。

（二乃はいねえか……）

「冷える前に出んだぞ」

「……どこに行くの？私に会いに来たんじゃ……？」

「え？」

「え？」

かまくらから離れようとした輝の動きが止まった。三玖も三玖で自分が何を言った

のか理解出来てないようだった。

「……………今なんて——」

「な、何でもない……………！ノーカン！」

「そ、そうか……………」

いつもの三玖からは想像できない程の剣幕で言われ、少したじろぐ。

その後ろでは遂に戦闘態勢から走り出した四葉が近づく。

輝は軽く咳払いし、口を開いた。

「ま、まあ、とにかく一花みたく風邪ひかねえようにな」

「……………」

三玖は下を向いたまま無言だったが、あまりにも居心地が悪いためその場から離れよ

うとした瞬間、

「あ——ま——み——や——っさ——んツ！！」

「このクソうるせえ声は四葉か？」

「だあらっしやああああい！！」

「ぐふっ!？」

陸戦用かな？あ、ちなみに僕はザ○派です。

渾身の四葉タツクルが背中にクリーンヒットした。

顔面から綺麗に新雪に突っ込んでいる。

「ほ、骨え……………背骨があ……………!!」

「天宮さん……………そうはなりませんよ……………」

「今なつとるやろがい……………」

—————

「す、すみませんでした」

「うん。嬉しくてタツクルしなくなつたつてのは百歩譲つて許してやる。ただな？加減

というものを知りなさい」

「う、嬉しくてつい……………」

「つたく……………」

背中を擦りながら、顔面から新雪に突っ込み鼻柱が赤い輝は今日何度目かわからないため息をつく。

「あんな勢いで突っ込んでこられたら受け止めれるもんも受け止めきれねえよ。今度からはゆつくり来なさい」

「ゆつくりですね！分かりました！」

反省しているのかしていないのかわからない笑顔で言ってくる四葉にまたため息を

ついた。

「あ、三玖！三玖のこと見ませんでしたか？」

「あ？あー……アイツならあっちに行っただぞ」

「ホントですか!?!ありがとうございます！」

そう言つて勢いよく立ち上がると、くるりと輝に向き直つた。

「……?」

「にししし、キャンプファイヤー楽しみですね！それじゃ！」

そう言つて輝が指さした方に走つて行つてしまつた。その姿を見送つたあと二乃探しを再開しようとした瞬間、かまくらから手が伸びた。

「あ？」

その手はこちらに手招きをしていた。おそらく三玖だろう。

「あんだよ、なんか用かああ!?!」

中を覗こうと痛い背中を擦りながら身をかがめるとその手に思いきり中に引きずり込まれた。

「せ、背中……痛てえ……」

「……」

三玖に抱きとめられるような姿勢がしばらく続き、先に口を開いたのは三玖の方だつ

た。

「・・・・・・・・・・さつきはありがとう」

「礼言われる程の事じゃねえよ」

「ん・・・・・・・・・・」

「にしても、案外あつたけえんだな。かまくらの中。お前が作ったのか？」

「ううん。元からあつた」

「そうか」

体勢を直すため動こうとするがそれを三玖は許さなかつた。

「狭いから・・・・・・・・あんまり動かないで・・・・・・・・」

「じゃあ俺が出る。二乃を探さねえと・・・・・・・・三玖？」

動こうとするがまたしても三玖はそれを許さなかつた。

「お、おい・・・・・・・・そろそろ・・・・・・・・」

「い、行かないで。出るのも・・・・・・・・だめ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？どうしたんだよ、急に」

「もう・・・・・・・・よくわかんない・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

輝はしばし考えたあと、軽く息を吐いてから改めて三玖の隣に腰を下ろした。

「……………!」

「まだ背中痛てえし、もう少しここにいろ」

「そ、そう」

しばらくの沈黙が続き、三玖が口を開いた。

「ねえ、ヒカル」

「んー?」

「五人で平等って、続くとと思う?」

「五人で平等?」

「うん。お母さんが言ってた。『大切なのはどこにいるかじゃなくて、五人でいる事』って」

「……………」

「最近よく思うんだ。フータローとヒカルが家庭教師で来てからずっと。変わらなかつたいろんな事が変わって行って……………一花は最近部屋の片付けをするようになって。二乃はもつと料理が上手くなって、四葉と五月は苦手な勉強を自分からするようになって……………それに比べて私は何も変わってない。ずっと、あの頃のまま」

「……………怖いかな?変わる事が」

「よくわかんないけど、多分そう……………皆が私の知らない皆になっていく気がし

て

三玖の話を聞いて、輝は静かに笑った。

「……ヒカル？」

「そうか、そうだよな。怖いよな、変わっていくって」

「うん……」

「でも、変わることを恐れちゃいけないと俺は思う」

人は何かが上手く行き出すと変わることを恐れるようになる。上手くいっていてもだ。変化そのものを避けたいものだと考える人も多いはずだ。

「でも、変わっちゃったたら先が見えなくなるよ……そんなの怖いと思う。見えなくなるくらいなら私は変わりにたくない。そっちの方が……」

先のことをちゃんと見据えて生きておきたいから。

その方が……

「安心するから……」

「それも一理あると思う。でもさ、変わっていかねえと置いてけぼりになるぞ。古い価値観のまま置いてけぼりになっちゃう。だから、俺はお前に色んなことを知って欲しい」

三玖の頭にそつと手を置き、続ける。

「変わることは、本当は楽しいことだつて。自分が変われば、お前の見てる世界も変わつていく事を」

「……………」

「だからもつとお互いを知るべきだ、まずはな。そのためには平等いまのままじゃダメだ」

そして、今度は三玖と目線を合わせる。

「俺はお前たちと平等な関係じゃなくて公平な関係でいてえ。俺もガリ勉もお前たちの今までの頑張りを否定しないし、出来ないからつて見捨てたりもしない。俺たちはお互いを知らなすぎたな。だからもつと教えてくれよ、お前たちのこと」

そう言つて笑う輝に三玖は目を奪われた。

「変わることを恐れんな。平等じゃなく公平に行こうぜ、相棒。持ちつ持たれつでな」

その言葉に私は何度も助けられ、その笑顔に何度も勇気をもらい、その差し伸べられた手に何度も救われた。

(あ……………そっか、だから私はこんなにもヒカルに……………)

私に変わる切っ掛けをくれた大切な人……

「……ありがとう、ヒカル」

「おう。話ぐらいなら聞いてやれるぞ、いくらでも」

続く

私の初恋の人――――

E p. 17 結びの伝説 2000日後の君へ

「まあ、偉そうな事言っておいてあれだけど」

「ん……?」

「そのウエア貸してくんなー」

「やだ」

「はーん」

最早腰の痛みなど気にしていられないのか、忙しく動き始める輝に目が点になる。

「もう無理! 流石に寒い! このままじゃ死んじゃまう!」

かまくらから飛び出て騒ぎ回る。先程のなんかいい感じの雰囲気は遥か彼方にとんでいってしまった。立ち気味だったフラグを難なくへし折って行く。

「み、みぐ! おめえも風邪ひく前に出んだぞ!」

「う、うん」

『ぢぐじよおおお! にのどごに行っだあああ! じもいでえええ!』

鼻水が出てしまうのか喉りながらくもった声でそう言い、コテージに猛ダツシユで走って行った。

取り残された三玖はぼかーんと立ったままだった。

一方、捕食者から逃げる脱兎の如く速さでコテージに備え付けてある暖炉の前に行き縮こまった輝というと、

「あつたけえなあ………」

ホクホク顔である。しかし、幸せな時間は長くは続かなかつた。

実行委員のメンバーの一人が輝の元に駆け込んで来たのだ。

「天宮！大変だぞ！お前のクラスの中野と上杉がいなくて騒ぎに——！」

「俺、生まれ変わったら火になるんだワ」

「へけっ!？」

今度は委員長の佐藤が舞い込んで来た。

「天宮くん！大変だよ！五月ちゃんとお上杉くんがいないって騒ぎに——んっ!？」

「離せえええ！俺は火になるんだワアア！」

佐藤が目にしたのは暖炉に引つ付き離れない輝を引つ張る委員会のメンバーがいた。

「なあにこれえ………」

「何言ってるんだ！天宮！火傷するから離れなさい！あ、佐藤！手伝ってくれ！天宮がとうとうバグリやがった！」

「なあんでこんな時にい………！しっかりしてよ！」

「まーん……」

二人が輝を連れて集まる頃には、既に教師陣も集まっております事態の深刻さが嫌でも伝わってくる。

「結構ヤバイ感じだな……」

「このゲレンデ、結構広いしね……遭難って事は多分ないと思うけど下手したら」
「レスキュー要請も考えなきゃならないのか……佐藤、どうする？先生たちに任せるか？」

「お、おい！五月とガリ勉がいねえってどういう事だよ！」

「え、い、今？」

外を見ると既に日は沈み、風も日中より強くなっていた。

「レスキューなんざ待つてらんねえ……行ってくる」

「え、ちよ……天宮くん！行くってどこに!？」

「決まってるだろ、探しにだよ」

近くにあつたウェアを着て外に出る。しかし、いざ外に出てみれば何故か風が強くなる。もしかしたら自分は風男なのかもしれない。

（うわあ……行きたくねえ……）

なんて言ってる場合ではないと気合いを入れ直し、ゲレンデに向かおうとした瞬間見

慣れた三人が輝を呼び止めた。

「天宮……！アンタこの天気で探しに行くつもり!?」

「あ、二乃見つけ」

「あ、二乃見つけ」じゃないわよ!アンタ正気!?

「この天気だからこそだろ。これ以上荒れたらほんとに身動き取れなくなっちゃう」

「そうだけど……!」

「んな泣きそうな顔すんなよ。大丈夫だから」

三玖と四葉の顔も風が強まる度に不安の色を強める。

「そろそろ行く。急がねえと」

「……ヒカル」

「ぐおっ……!?!」

ウェアのフードを後ろから三玖に捕まれ、若干仰け反る形になった。

「三玖、腰……」

「ご、ごめん……!」

「んで?なんだ?」

腰をさすりながら三玖の方を見ると心配そうにこちらを見ていた。

「あまり、無理しないでね。ヒカルに何かあったら私、嫌だから」

「私もです！」

(四葉ア、お前に關しては既にやらかしてんだよなあ。腰をよオ)

しかしここはデキる男、天宮くん。思つていても口には出しません。顔には出ますが。

「あ、あれ？天宮さん、私を見る目が何か怖い気が……」

「……なんでもねえよ。とにかく、探しに行つてくつからお前らは待つてな」

「絶対、帰つてきなさいよ」

「ん、わかつてる」

そう言つてゲレンデへと歩みを進めた。

輝が二人を探しにゲレンデに向かつて数分後、体調不良に加え寒さの影響でぐったりとした風太郎を背負いながら無事コテージに戻つたことにより何とか事が大きくなることも無く教師陣は胸を撫で下ろした。

発熱中の風太郎はすぐさまコテージの部屋へと連行され、五月は二乃からしこたま説教された2週間の食事制限勧告。本人曰く『人間の三大欲求の一つを制限するのは最早人間の所業ではない。起訴する方向である』と述べているが、軽く一蹴された。

輝に関しては遂に腰の限界が来たらしく、コテージに着くなりその場に倒れ込みこちらも部屋に担ぎ込まれた。

「天宮が死んだ！」

「この人でなし！」

「勝手に殺すんじゃないやねえよ！」

「結局風止んだな」

部屋の窓から外のキャンプファイヤーを眺めながら愚痴る。

「それに、なんでお前がいんだよ」

「な、なによ！いちや悪いわけ!？」

「あんだだけキャンプファイヤーの伝説があーだこーだ言ってたのに行かなくていいのか？」

「アンタがそんなんじゃない意味ないじゃない」

「その話まだ続いてたのかよ！」

「当たり前でしょ？お生憎様、私は諦めが悪いのよ」

そう言つて剥き終わったリングを差し出す。

「はい」

「俺はいいからガリ勉に持ってってやりな」

「アンタのために剥いたんだからアンタが食べんのよ」

「むぐつ!?!」

無理やり口の中に押し込まれ、二乃を睨みながらリンゴを食べる。

「これからどうするの?」

「んあ? ああ、一応顔だけは出しに行くつもり。片付けは手伝えそうにねえけど」

「そう。ざーんねん、キャンプファイヤー踊れなくなっちゃったわ」

「んだよ。俺を見んな」

ジト目で睨んでくる輝をかわしながら窓の外に視線を向ける。

「……………そんなに気になんなら行ってこいよ。お前と踊りたい奴なら何人か知って

るぞ」

「……………」

「……………? 二乃?」

「はあああ……………」

急にクソデカため息を吐く二乃を見ると、呆れた視線を向けられた。

「ほんつと、アンタといい上杉といいなんでこうデリカシーがないことしか言えないの

かしら……逆に不思議だわ」

「え、なんかすんません」

「……まあいいわ」

「どこことなく気落ちしている二乃を見ながら軽く息を吐き、重い腰ならぬ痛い腰を上げた。

「え、ちよ！安静にしてなさいよ！」

「うっせえな。んな辛気くせえ顔されてたらたまんねえんだよ。おら、行くぞ」

「行くつてどこに……？」

「ガリ勉とこ。アイツらもいんだろ？」

「ええ、まあ」

それだけ聞くと部屋を出る。その後を追うように二乃もついてきた。

風太郎がいる部屋のドアを開けると案の定二乃を除いた四人がいた。

「よ、ガリ勉元気か」

「寝てるよ、ぐっすり」

「だ、ダメですよ！天宮くん！あなたも安静にしてないと……！」

「大丈夫だつてこんくらい。ほれ、どうよ。何ともねえだろ」

大丈夫だという表現なのだろうか、色々と体を動かしてみせる。

しかし、二乃が腰を軽くつついてみると、

「つとおお．．．．．!!」

「そのどろろが大丈夫なのよ」

床に崩れ落ち悶絶している姿へと変わった。

「何すんだ．．．．．!このツンデレ大魔神があ．．．．．!」

「だ、誰が．．．．．!?!」

「二乃以外いない」

「三玖!?!」

「ほれ見ろ!お前は一生ツンデレ娘なんだよ!」

「だ、黙りなさい!このっ!」

「いっただああああ!!」

(仲良いなあ)

一花と四葉はそんな事を思っているのとは裏腹に三玖は何故か不機嫌そうに二人を見ています。

「．．．．．二乃。ヒカルが困ってる、離れて」

「なによ、三玖。邪魔しないで」

「邪魔してるのはそっち。ね、ヒカル」

「うえ!?! あ、いや、邪魔というか……」

「なに、私が邪魔だって言うの!?!」

「いや、邪魔なんて言ってるな……」

「そうだよ。ヒカルも邪魔だって言ってる」

「ヴえ!?! 三玖さん!?!」

「天宮はそうでもないようだけど? ねえ?」

「まあ確かに距離がちけえとは思ってたけど……」

「何か言った?」

「いえ、なにも……」

他の三人に助けを求めようと視線を向けると一花と四葉はあからさまに視線を外し、

五月は二人の後ろに隠れてこちらを見ていた。

(イツギザアン!?! ナズエミテルンデイス!! 助けてよ!)

(無、無理です! ごめんなさい!)

二人でアイコンタクトでの会話をしていると二乃に首根っこを掴まれる。

「ちよつと! 天宮、聞いているの!?!」

「ちよあつ! な、何をだ……?」

「ヒカル、こつちおいで」

「天宮、こつちよ！」

「あーもうめちやくちやだよ」

十分ほど続いた二人の口喧嘩は三人の仲裁で終わりを迎えたが未だに睨み合っている二人を放つといて四葉がある提案をする。

「そうだ！上杉さんが早く良くなるおまじないしようよ！」

「おまじない？」

「うん！私たち丁度五人でしょ？一人一本上杉さんの指を握って良くなりますようにしておまじないをするんだよ！もちろん、天宮さんも！」

「良いですね」

「お前らそこまですておけよー」

呼び掛けに渋々二乃と三玖は離れていく。

「でも一人溢れねえか？」

「ヒカルくんはあそこじゃない？」

「え、あそこ？……スウ……」

「あそこしかないよね！」

「あそこでしょうか」

「まあ、あそこしかないわね」

「うん、あそこだけ」

「正気か!？」

あまりにも『あそこ』を連呼するため内心穏やかではない。

『あそこ』を触らせられる自分の身にもって欲しい。

あらぬ誤解を後に生まないように、後顧の憂いはここで断たなければならない。

「それだけは勘弁してください。何でもしますから」

故の初手安定の土下座である。

「天宮さん何言ってるんですか?」

「ほらほら、早く握って」

五人がそれぞれ風太郎の左手の指を握ると、一花が輝の手を自分たちの手の上に乗せる。

「お、おお・・・..?」

「どうしたの?キョトンとして」

「い、いや?なににも?」

心の中でそつと胸を撫で下ろした。

初手土下座しとけば何とかなるって古事記にも書かれてるから。

「変わったまじないだな・・・..」

「五人の美女に指を握られるなんてフータローくんも隅に置けないね」

「一花、アンタも風邪治つてないんだからあんまり喋らないで」

「フータロー、良くなるかな」

「良くなるよ！」

「静かにしてください！上杉くんが起きてしまいます！」

「散々騒いでも起きねえんだから大丈夫だろ、知らんけど」

外ではファイナーレを飾る花火が上がる

すると、風太郎が目をおかっ開きこちらを見た。

「あー！起きましたー！」

「良かったですね！」

「……るせえ」

ボソツと風太郎が喋ると同時に輝はすぐさま部屋のドアへと向かう。

「ガリ勉は大丈夫そうだな、ヨシ！」

「うるせえええ！寝れねえだろおとおお!!」

「うわうわうわ、急に叫びだしたわ！」

「退散」

「お前ら全員出てけえええ！」

「わー!」

六人が一斉に風太郎の部屋を飛び出す。

期せずしてフィナーレで五人と手を繋いでいた風太郎は近い将来この五人の誰かと結ばれるのだろうか。

輝と結ばれる相手がわかるのはまだ遠い話。

—————

結びの伝説から2000日後——

友人の結婚式が行われる式場を駆ける一つの影。

「お、お客様!お名前の確認を——」

「え!?あ、天宮輝です……!」

「天宮様ですね。上杉様と中野様の式場はあちらに……」

「ありがとうございます!」

そう言い、また走って言った。

「そろそろ新婦の入場があるので……行っちゃった」

正直林間学校の事はあまり覚えてない。

災難続きだったのはよく覚えているが、不思議と嫌な覚えもない。

結びの伝説

キャンプファイヤーの結びの瞬間、手を結んだ二人は生涯添い遂げる縁で結ばれるという

「誓いのキスを」

神父の言葉と同時にエントランス扉が開き、一同が振り向く。

「え．．．．!?お兄．．．．!?」

「来んのが遅いのよ、毎回．．．．．」

伝説とか運命とかそんなもの今でも信じちやいない。

けれどこの際、存在を認めざるを得ないかもしれない。

「はあ．．．．!はあ．．．．!滑り込み、セーフだな．．．!」

結びの伝説　く2000日後の君へく